VI　そ　の　他

大阪感染症情報解析委員会 「今週のトピックス」

毎週火曜日に、その前の１週間に府内保健所に報告があった全数把握感染症および、小児科定点把握疾患と眼科定点疾患の数を集計し、水曜日に開催される大阪感染症情報解析委員会において府内における感染症の流行状況を検討し、「今週のトピックス」を決定している。この情報は、大阪府感染症情報センターのホームページ（http://iph.pref.osaka.jp）を通じて広く府民に還元した。

2024 年　小児科・眼科定点把握感染症の報告数上位５疾患とトピックス

週	1位		2位		3位		4位		5位		ＴＯＰＩＣＳ
52	感染性胃腸炎	3.89	A群溶連菌咽頭炎	2.78	咽頭結膜熱	1.24	手足口病	0.44	流行性角結膜炎	0.31	新型コロナウイルス感染症 引き続き増加
1	感染性胃腸炎	2.48	A群溶連菌咽頭炎	1.53	咽頭結膜熱	0.65	手足口病	0.34	流行性角結膜炎	0.23	
2	感染性胃腸炎	4.63	A群溶連菌咽頭炎	2.59	咽頭結膜熱	0.89	流行性角結膜炎	0.46	手足口病	0.24	新型コロナウイルス感染症 増加続く
3	感染性胃腸炎	7.25	A群溶連菌咽頭炎	3.63	咽頭結膜熱	0.60	手足口病	0.42	流行性角結膜炎	0.38	インフルエンザ 増加続く
4	感染性胃腸炎	7.81	A群溶連菌咽頭炎	3.85	手足口病	0.52	咽頭結膜熱	0.51	RSウイルス感染症	0.27	インフルエンザ 引き続き増加
5	感染性胃腸炎	8.31	A群溶連菌咽頭炎	4.13	手足口病	0.56	咽頭結膜熱	0.39	流行性角結膜炎	0.27	インフルエンザ 警報レベルに迫る
6	感染性胃腸炎	7.28	A群溶連菌咽頭炎	4.28	咽頭結膜熱	0.52	手足口病	0.42	RSウイルス感染症	0.34	インフルエンザ 高水準で続く
7	感染性胃腸炎	5.87	A群溶連菌咽頭炎	2.87	手足口病	0.54	咽頭結膜熱	0.42	RSウイルス感染症	0.38	インフルエンザ・新型コロナウイルス感染症 今後の動向に注意
8	感染性胃腸炎	5.65	A群溶連菌咽頭炎	3.02	RSウイルス感染症	0.66	手足口病	0.56	咽頭結膜熱	0.36	RSウイルス感染症 増加
9	感染性胃腸炎	5.92	A群溶連菌咽頭炎	3.06	RSウイルス感染症	1.02	手足口病	0.48	流行性角結膜炎	0.44	RSウイルス感染症 増加続く
10	感染性胃腸炎	6.20	A群溶連菌咽頭炎	3.58	RSウイルス感染症	1.55	手足口病	0.43	咽頭結膜熱	0.41	RSウイルス感染症 さらに増加
11	感染性胃腸炎	6.05	A群溶連菌咽頭炎	3.32	RSウイルス感染症	1.84	手足口病	0.53	咽頭結膜熱	0.36	RSウイルス感染症 引き続き増加
12	感染性胃腸炎	5.08	A群溶連菌咽頭炎	3.08	RSウイルス感染症	2.23	咽頭結膜熱	0.36	手足口病	0.35	RSウイルス感染症 増加続く
13	感染性胃腸炎	4.69	RSウイルス感染症	2.63	A群溶連菌咽頭炎	2.53	手足口病	0.55	流行性角結膜炎	0.43	RSウイルス感染症　8週連続で増加
14	感染性胃腸炎	4.09	RSウイルス感染症	3.39	A群溶連菌咽頭炎	2.52	手足口病	0.48	咽頭結膜熱	0.34	RSウイルス感染症　増加続く
15	感染性胃腸炎	4.63	RSウイルス感染症	3.95	A群溶連菌咽頭炎	2.58	手足口病	0.81	流行性角結膜炎	0.65	RSウイルス感染症 10週連続増加
16	感染性胃腸炎	5.09	RSウイルス感染症	4.41	A群溶連菌咽頭炎	3.53	手足口病	1.07	流行性角結膜炎	0.51	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加
17	感染性胃腸炎	5.60	A群溶連菌咽頭炎	3.97	RSウイルス感染症	2.98	手足口病	1.30	流行性角結膜炎	0.58	インフルエンザ 非流行期へ
18	感染性胃腸炎	3.17	A群溶連菌咽頭炎	2.32	RSウイルス感染症	1.87	手足口病	1.18	咽頭結膜熱	0.40	手足口病 今後の動向に注目
19	感染性胃腸炎	4.72	A群溶連菌咽頭炎	2.92	手足口病	1.77	RSウイルス感染症	1.71	流行性角結膜炎	0.52	手足口病 増加
20	感染性胃腸炎	5.76	A群溶連菌咽頭炎	4.57	手足口病	2.95	RSウイルス感染症	1.47	咽頭結膜熱	0.51	手足口病・A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 いずれも増加
21	感染性胃腸炎	6.05	手足口病	4.35	A群溶連菌咽頭炎	4.25	RSウイルス感染症	1.28	咽頭結膜熱	0.79	手足口病 増加続く
22	手足口病	6.11	感染性胃腸炎	5.72	A群溶連菌咽頭炎	4.10	RSウイルス感染症	0.86	咽頭結膜熱	0.86	手足口病 警報レベル超える
23	手足口病	7.33	感染性胃腸炎	5.57	A群溶連菌咽頭炎	4.45	ヘルパンギーナ	1.05	咽頭結膜熱	0.84	手足口病 さらに増加
24	手足口病	7.54	感染性胃腸炎	5.05	A群溶連菌咽頭炎	4.04	ヘルパンギーナ	1.15	咽頭結膜熱	0.9	新型コロナウイルス感染症 増加
25	手足口病	8.81	感染性胃腸炎	4.40	A群溶連菌咽頭炎	3.68	ヘルパンギーナ	1.3	咽頭結膜熱	0.76	手足口病 増加続く
26	手足口病	8.95	感染性胃腸炎	4.39	A群溶連菌咽頭炎	3.49	ヘルパンギーナ	1.43	咽頭結膜熱	0.70	新型コロナウイルス感染症 増加
27	手足口病	9.44	感染性胃腸炎	3.94	A群溶連菌咽頭炎	3.02	ヘルパンギーナ	1.42	RSウイルス感染症	0.73	新型コロナウイルス感染症 全ブロックで増加
28	手足口病	9.85	感染性胃腸炎	3.59	A群溶連菌咽頭炎	2.79	ヘルパンギーナ	1.64	RSウイルス感染症	1.05	新型コロナウイルス感染症 増加続く
29	手足口病	8.08	感染性胃腸炎	3.14	A群溶連菌咽頭炎	2.21	ヘルパンギーナ	1.48	RSウイルス感染症	0.81	新型コロナウイルス感染症 全ブロックで３週連続増加
30	手足口病	7.45	感染性胃腸炎	3.15	A群溶連菌咽頭炎	2.06	ヘルパンギーナ	1.29	RSウイルス感染症	1.01	マイコプラズマ肺炎 今後の動向に注意
31	手足口病	6.08	感染性胃腸炎	2.98	A群溶連菌咽頭炎	1.80	ヘルパンギーナ	1.19	RSウイルス感染症	1.01	マイコプラズマ肺炎　2016年以来の報告数の増加
32	手足口病	4.34	感染性胃腸炎	2.51	A群溶連菌咽頭炎	1.55	ヘルパンギーナ	0.77	RSウイルス感染症	0.71	マイコプラズマ肺炎、過去10年と比べて多い報告数
33	手足口病	1.78	感染性胃腸炎	1.23	A群溶連菌咽頭炎	0.81	RSウイルス感染症	0.42	ヘルパンギーナ	0.38	マイコプラズマ肺炎　引き続き多い
34	手足口病	2.67	感染性胃腸炎	2.59	A群溶連菌咽頭炎	1.38	RSウイルス感染症	0.50	ヘルパンギーナ	0.42	マイコプラズマ肺炎　報告数多い状態が続く
35	手足口病	3.84	感染性胃腸炎	2.88	A群溶連菌咽頭炎	1.57	RSウイルス感染症	0.68	ヘルパンギーナ	0.48	手足口病　今後の動向に注意
36	手足口病	4.69	感染性胃腸炎	3.16	A群溶連菌咽頭炎	1.80	RSウイルス感染症	0.88	ヘルパンギーナ	0.36	手足口病　警報レベル迫る
37	手足口病	4.93	感染性胃腸炎	3.06	A群溶連菌咽頭炎	1.99	RSウイルス感染症	0.84	ヘルパンギーナ	0.30	マイコプラズマ肺炎　高い報告数続く
38	手足口病	4.49	感染性胃腸炎	2.74	A群溶連菌咽頭炎	1.71	RSウイルス感染症	0.68	突発性発しん	0.25	新型コロナウイルス感染症 減少続く
39	手足口病	4.91	感染性胃腸炎	2.50	A群溶連菌咽頭炎	1.40	RSウイルス感染症	0.45	流行性角結膜炎	0.33	インフルエンザ　2週連続して漸増
40	手足口病	5.48	感染性胃腸炎	2.94	A群溶連菌咽頭炎	1.84	RSウイルス感染症	0.47	流行性角結膜炎	0.42	インフルエンザ　流行開始期入りの目安に近づく
41	手足口病	6.39	感染性胃腸炎	2.87	A群溶連菌咽頭炎	1.64	RSウイルス感染症	0.63	流行性角結膜炎	0.42	手足口病 警報レベルで推移
42	手足口病	5.30	感染性胃腸炎	2.73	A群溶連菌咽頭炎	1.38	RSウイルス感染症	0.53	流行性角結膜炎	0.38	手足口病　警報レベル続く
43	手足口病	4.66	感染性胃腸炎	3.10	A群溶連菌咽頭炎	1.71	RSウイルス感染症	0.40	流行性角結膜炎	0.37	マイコプラズマ肺炎 報告数多い状態が持続
44	手足口病	4.12	感染性胃腸炎	3.37	A群溶連菌咽頭炎	1.54	RSウイルス感染症	0.57	突発性発しん	0.26	手足口病　３週連続減少
45	手足口病	3.53	感染性胃腸炎	2.70	A群溶連菌咽頭炎	1.23	RSウイルス感染症	0.69	咽頭結膜熱	0.28	インフルエンザ 3週連続増加
46	感染性胃腸炎	3.44	手足口病	2.53	A群溶連菌咽頭炎	1.64	RSウイルス感染症	0.81	流行性角結膜炎	0.46	インフルエンザ　流行期入り
47	感染性胃腸炎	3.59	手足口病	2.05	A群溶連菌咽頭炎	1.31	RSウイルス感染症	0.52	流行性角結膜炎	0.46	インフルエンザ増加
48	感染性胃腸炎	4.29	手足口病	1.74	A群溶連菌咽頭炎	1.58	RSウイルス感染症	0.62	流行性角結膜炎	0.37	インフルエンザ　全ブロックで増加
49	感染性胃腸炎	5.16	A群溶連菌咽頭炎	1.65	手足口病	1.16	RSウイルス感染症	0.83	咽頭結膜熱	0.53	インフルエンザ　注意報レベルを超える
50	感染性胃腸炎	5.19	A群溶連菌咽頭炎	1.88	RSウイルス感染症	0.89	手足口病	0.80	咽頭結膜熱	0.41	インフルエンザ　2週連続で倍増
51	感染性胃腸炎	5.06	A群溶連菌咽頭炎	1.79	RSウイルス感染症	0.96	手足口病	0.57	流行性角結膜炎	0.42	インフルエンザ　警報レベルを大きく超える
52	感染性胃腸炎	4.90	A群溶連菌咽頭炎	1.58	RSウイルス感染症	1.09	流行性角結膜炎	0.48	咽頭結膜熱	0.44	（2025年第1週との合併）

注1：疾患名は小児科定点・眼科定点の対象疾患です。　注2：週遅れデータは含まれていません。
注3：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎はA群溶連菌咽頭炎と表示しています。

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2023年 第52週（12月25日～12月31日）～ 2024年 第1週（1月1日～1月7日）

今週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「新型コロナウイルス感染症 引き続き増加」

2023年第52週と2024年第1週をあわせて報告する。年末年始休暇による診療実日数の減少を考慮する必要がある。

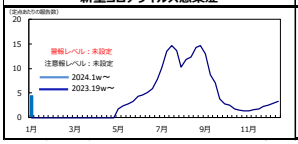
第52週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,771例であり、前週比33.3%減であった。 定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.89、2.78、1.24、0.44、0.31である。

第1週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,088例であり、前週比38.6%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.48、1.53、0.65、0.34、0.23である。

第1週のインフルエンザは25%減の3,572例で、定点あたり報告数は11.67であった。大阪市西部42.60、大阪市北部17.35、南河内15.13、堺市12.24、泉州10.97である。

新型コロナウイルス感染症は第52週は15%増の1,026例で、定点あたり報告数は3.35であった。第1週は41%増の1,444例で、定点あたり報告数は4.72である。大阪市西部12.07、南河内6.00、北河内5.12、豊能4.89、堺市4.86であった。2023年第39週から第52週で、60歳以上の累積入院者数は574例であり、78%を占めている。

新型コロナウイルス感染症



インフルエンザ

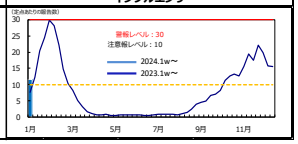


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第1週1月1日～1月7日）

第1週の順位	第52週の順位	感染症	2024年第1週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第1週の定点あたり報告数	2024年第1週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	2.48	36%減	2.86	１歳_17%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.53	45%減	0.16	10-14歳_15%
3	3	咽頭結膜熱	0.65	47%減	0.10	２歳,４歳,５歳_15%
4	4	手足口病	0.34	23%減	0.14	１歳_43%
5	5	流行性角結膜炎	0.23	25%減	0.08	20歳以上_92%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	11.67	25%減	7.57	20歳以上_51%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	4.72	41%増	-	20-29歳_16%

第1週のコメント

～バンコマイシン耐性腸球菌感染症～　2023年の大阪府の報告数は、15例であった。

全数把握感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌（VRE）は、バンコマイシンに耐性を獲得した腸球菌である。術後患者や感染防御機能の低下した患者では腹膜炎、術創感染症、心内膜炎、尿路感染症、敗血症などの感染症を引き起こす場合があるため、集中治療室や外科治療ユニットなど易感染者を治療する部門で問題となっており、臨床的、疫学的に重要な薬剤耐性菌である。VREによる術創感染症や腹膜炎などの治療は、抗菌薬の投与とともに感染巣の洗浄やドレナージなどを適宜組み合わせて行う。

薬剤耐性菌感染症 －バンコマイシン耐性腸球菌
バンコマイシン耐性腸球菌感染症（国立感染症研究

大阪府年別累積報告数

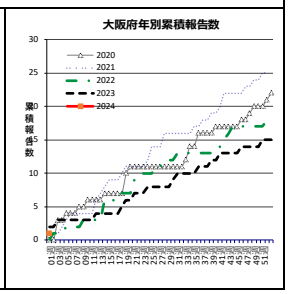


表２．大阪府全数報告数（2024年 第1週1月1日～1月7日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
４類感染症	レジオネラ症(肺炎型)	1					1					1
５類感染症	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1							1			1
結核（2023年11月分）	結核　新登録患者数：77名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　29名）（府内累積報告数　1,021名、内　肺・喀痰塗抹陽性　350名）											

（2024年1月9日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第2週（1月8日～1月14日）

今週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「新型コロナウイルス感染症 増加続く」

第2週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,770例であり、前週比62.7%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、流行性角結膜炎、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.63、2.59、0.89、0.46、0.24である。

感染性胃腸炎は前週比87%増の913例で、北河内5.92、南河内5.69、大阪市北部5.21、中河内5.10、三島4.94であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は69%増の511例で、南河内3.94、泉州3.57、大阪市西部3.00である。

咽頭結膜熱は36%増の175例で、北河内1.52、中河内1.35、南河内1.13であった。

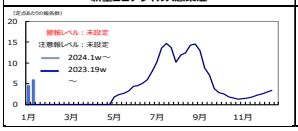
流行性角結膜炎は100%増の24例で、北河内1.50、大阪市東部1.00、中河内0.60である。

手足口病は28%減の48例で、中河内0.60、大阪市北部0.43、泉州0.33であった。

インフルエンザは3%増の3,695例で、定点あたり報告数は12.08である。大阪市西部16.87、南河内16.58、大阪市北部15.90、泉州15.38、堺市14.83であった。年齢分布では、14歳以下が全体の59%を占めている。AH3、AH1pdmに加えて、B型が検出されている。

新型コロナウイルス感染症は31%増の1,891例で、定点あたり報告数は6.18と9週連続して増加していた。堺市9.62、南河内7.75、泉州6.41、大阪市北部6.35、大阪市西部6.20である。2024年第1週以降、入院サーベイランスにおける基幹定点医療機関からの報告数は183名で、そのうち70歳以上が67%を占めている。

新型コロナウイルス感染症



インフルエンザ

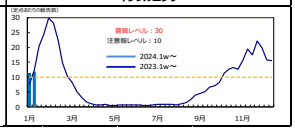


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第2週1月8日～1月14日）

第2週の順位	第1週の順位	感染症	2024年第2週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第2週の定点あたり報告数	2024年第2週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.63	87%増	4.72	１歳_14%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.59	69%増	0.26	10-14歳_14%
3	3	咽頭結膜熱	0.89	36%増	0.10	３歳_17%
4	5	流行性角結膜炎	0.46	100%増	0.10	20歳以上_83%
5	4	手足口病	0.24	28%減	0.05	１歳_44%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	12.08	3%増	12.22	20歳以上_34%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	6.18	31%増	-	50-59歳_12%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の『令和2年11月2日以降(大阪府)』の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の『新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)』の情報をご覧ください。
突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第2週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～　大阪府では、毎年2-4例の報告があります。

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌（*Neisseria meningitidis*）による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜刺激症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群（DIC）を呈する。髄膜炎ベルト（meningitis belt）とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、ペニシリン系抗菌薬と第三世代セフェム系抗菌薬が有効である。患者との接触者には、緊急に、リファンピシンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌（血清型A、C、Y、W-135）ワクチンの任意接種が開始されている。

侵襲性髄膜炎菌感染症（厚生労働省）

年別累積報告数

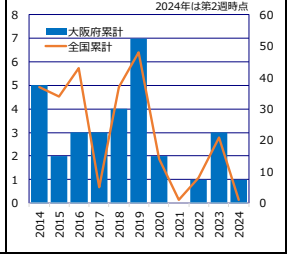


表２．大阪府全数報告数（2024年 第2週1月8日～1月14日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1		1
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2							1	1		3
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	4			1					3		5
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1		1
	後天性免疫不全症候群	1			1							1
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2	1							1		2
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1	1									1
	侵襲性肺炎球菌感染症	6	1			1			3		1	11
	梅毒	7		1		1					5	11
	百日咳	1									1	1
結核（2023年11月分）	結核　新登録患者数：77名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　29名）（府内累積報告数　1,021名、内　肺・喀痰塗抹陽性　350名）											

（2024年1月16日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第3週（1月15日～1月21日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 増加続く」

第3週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,470例であり、前週比39.5%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.25、3.63、0.60、0.42、0.38である。

感染性胃腸炎は前週比56%増の1,428例で、南河内12.56、大阪市北部8.86、堺市8.26、中河内8.05、大阪市南部7.78であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は40%増の715例で、大阪市南部5.61、北河内4.44、大阪市西部4.30である。

咽頭結膜熱は33%減の118例で、南河内1.06、北河内1.00、堺市0.68であった。

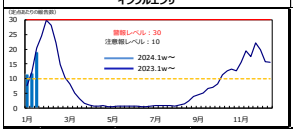
手足口病は71%増の82例で、南河内0.88、中河内0.75、泉州0.67である。

流行性角結膜炎は17%減の20例で、泉州1.00、中河内0.80、北河内・大阪市西部・大阪市東部0.50であった。

インフルエンザは59%増の5,884例で、定点あたり報告数は19.23である。南河内29.83、泉州28.09、堺市25.59、大阪市西部21.73、大阪市北部21.40であった。年齢分布では、14歳以下が全体の74%を占めており、昨週の割合59%からさらに高率となっている。先週に引き続き、B型が検出されている。

新型コロナウイルス感染症は29%増の2,436例で、定点あたり報告数は7.96と10週連続して増加していた。堺市11.24、南河内10.00、泉州9.29、北河内8.05、大阪市北部7.65である。2024年第1週以降、入院サーベイランスにおける基幹定点医療機関からの報告数は324名で、そのうち70歳以上が69%を占めている。

インフルエンザ



新型コロナウイルス感染症

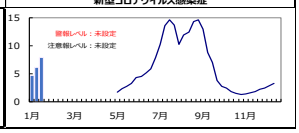


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第3週1月15日～1月21日）

第3週の順位	第2週の順位	感染症	2024年第3週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第3週の定点あたり報告数	2024年第3週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	7.25	56%増	6.49	１歳_15%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.63	40%増	0.39	５歳_15%
3	3	咽頭結膜熱	0.60	33%減	0.16	１歳_18%
4	5	手足口病	0.42	71%増	0.13	１歳_46%
5	4	流行性角結膜炎	0.38	17%減	0.13	20歳以上_75%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	19.23	59%増	20.46	10-14歳_23%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	7.96	29%増	-	10-19歳_14%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。
突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第3週のコメント

～侵襲性肺炎球菌感染症～　大阪府では、コロナ禍前の2019年までは毎年250例以上の報告がありました

全数把握感染症

侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、感染症法上、肺炎球菌（*Streptococcus pneumoniae*）による感染症のうち、この菌が髄液又は血液等の無菌部位から検出された感染症のことをいう。髄膜炎、菌血症を伴う肺炎、敗血症などが特に問題とされており、小児および高齢者を中心に患者報告がある。抗菌薬が有効であるが、薬剤耐性菌も多く報告されている。侵襲性肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効である。小児および高齢者への定期接種が実施されており、また、64歳以下で肺炎球菌による重症化の危険性が高い人への接種が重要である。

肺炎球菌感染症（高齢者）（厚生労働省）
侵襲性肺炎球菌感染症とは（国立感染症研究所）

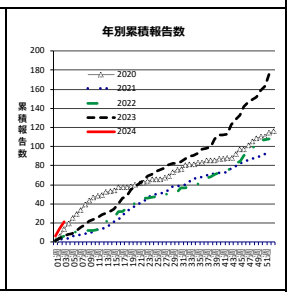


表２．大阪府全数報告数（2024年 第3週1月15日～1月21日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】>全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3							2	1		4
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	4								3		8
	レジオネラ症（ポンティアック型）						1					
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1		1								8
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2					1			1		3
	後天性免疫不全症候群	2								2		5
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2					2					5
	侵襲性肺炎球菌感染症	7		2	1		1	1	1	1		21
	梅毒	20	1		1				1	17		54
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1								1		3
結核（2023年11月分）	結核　新登録患者数：77名（内　肺・喀痰塗抹陽性　29名）（府内累積報告数　1,021名、内　肺・喀痰塗抹陽性　350名）											

（2024年1月23日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第4週（1月22日～1月28日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　引き続き増加」

第4週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,640例であり、前週比6.9%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.81、3.85、0.52、0.51、0.27である。

感染性胃腸炎は前週比8%増の1,539例で、南河内13.56、堺市9.89、三島・中河内9.00、北河内8.72であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は6%増の758例で、北河内5.60、泉州5.10、堺市4.58である。

手足口病は24%増の102例で、大阪市北部0.93、堺市0.74、泉州0.71であった。

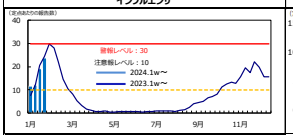
咽頭結膜熱は15%減の100例で、南河内1.13、泉州0.86、北河内0.64である。

RSウイルス感染症は83%増の53例で、泉州0.52、北河内0.48、南河内0.38であった。

インフルエンザは24%増の7,286例で、定点あたり報告数は23.81である。泉州36.32、南河内34.92、大阪市西部31.33、堺市28.93、北河内25.51である。3ブロックは警報レベル30を超えていた。B型が増えてきている。

新型コロナウイルス感染症は12%増の2,718例で、定点あたり報告数は8.88と11週連続して増加していた。北河内11.59、堺市11.00、南河内10.83、大阪市北部8.85、泉州8.82である。2024年第1週以降、入院サーベイランスにおける基幹定点医療機関からの報告数は462名で、そのうち70歳以上が68%を占めている。

インフルエンザ



新型コロナウイルス感染症

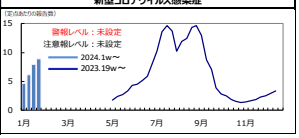


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第4週1月22日～1月28日）

第4週の順位	第3週の順位	感染症	2024年第4週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第4週の定点あたり報告数	2024年第4週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	7.81	8%増	6.56	１歳_14%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.85	6%増	0.57	６歳_14%
3	4	手足口病	0.52	24%増	0.10	１歳_50%
4	3	咽頭結膜熱	0.51	15%減	0.14	１歳_17%
5	8	RSウイルス感染症	0.27	83%増	0.13	１歳_32%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	23.81	24%増	24.34	10-14歳_30%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	8.88	12%増	-	10-19歳_18%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。
突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第4週のコメント

～劇症型溶血性レンサ球菌感染症～　国内では、毎年400-500例報告されており、致死率の高い感染症である

全数把握感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、主にA群溶血性レンサ球菌（*Streptococcus pyogenes*）による感染症である。国内では、毎年400-500例報告されており、約30%が死亡している。極めて致死率の高い感染症である。病状の進行が非常に急激かつ劇的で、発病後数十時間以内には軟部組織壊死、急性腎不全、成人型呼吸窮迫症候群、播種性血管内凝固症候群、多臓器不全を引き起こし、ショック状態から死に至ることがある。治療は、ペニシリン等の抗菌薬の投与と壊死に陥った軟部組織の切除が必要である。大阪府における2023年の報告数は過去10年で2番目に高かった。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症（大阪府感染症情報センター）
劇症型溶血性レンサ球菌感染症とは(国立感染症研究所)

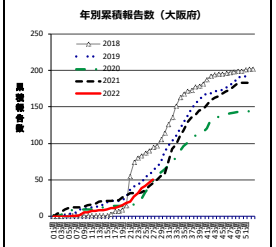


表２．大阪府全数報告数（2024年 第4週1月22日～1月28日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】>全数把握疾患　をご覧ください。
新型コロナウイルス感染症は、指定感染症として定める政令が施行された2月1日以降の集計です。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6				2	1			3		10
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2			1	1						10
５類感染症	アメーバ赤痢	1	1									2
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3		1	1	1						12
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	4					1	2	1			7
	後天性免疫不全症候群	1	1									7
	侵襲性肺炎球菌感染症	3	1							2		26
	梅毒	7						1		6		75
	百日咳	1							1			3
結核（2023年11月分）	結核　新登録患者数：77名（内　肺・喀痰塗抹陽性　29名）（府内累積報告数　1,021名、内　肺・喀痰塗抹陽性　350名）											

（2024年1月30日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第5週（1月29日～2月4日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 警報レベルに迫る」

第5週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,779例であり、前週比5.3%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、咽頭結膜熱、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ8.31、4.13、0.56、0.39、0.27である。

感染性胃腸炎は前週比6%増の1,638例で、南河内15.75、泉州9.43、三島8.88、中河内8.85、大阪市西部8.60であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は7%増の814例で、泉州5.48、南河内5.44、大阪市南部5.39である。

手足口病は8%増の110例で、中河内1.10、泉州0.90、大阪市南部0.78であった。

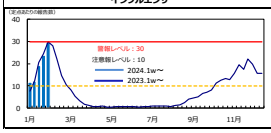
咽頭結膜熱は24%減の76例で、南河内1.13、泉州・大阪市北部0.43である。

流行性角結膜炎は100%増の14例で、泉州0.83、南河内0.75、大阪市西部0.50であった。

インフルエンザは24%増の9,069例で、定点あたり報告数は29.64と4週連続して増加している。南河内44.25、泉州38.00、大阪市北部35.25、堺市34.00、大阪市西部33.33であった。6ブロックは警報レベル30を超えている。1月のB型の割合は25%で、12月より20%増えている。

新型コロナウイルス感染症は5%増の2,863例で、定点あたり報告数は9.36と12週連続して増加している。南河内13.54, 北河内11.15、堺市10.59、中河内9.35、大阪市南部9.22であった。2024年第1週以降、19歳以下の年代層の割合が増えている。

インフルエンザ



新型コロナウイルス感染症

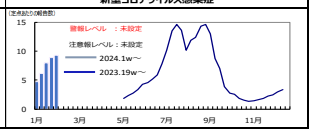


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第5週1月29日～2月4日）

第5週の順位	第4週の順位	感染症	2024年第5週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第5週の定点あたり報告数	2024年第5週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	8.31	6%増	6.88	１歳_13%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4.13	7%増	0.37	６歳,10-14歳_13%
3	3	手足口病	0.56	8%増	0.07	１歳_45%
4	4	咽頭結膜熱	0.39	24%減	0.13	１歳_22%
5	8	流行性角結膜炎	0.27	100%増	0.19	20歳以上_50%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	29.64	24%増	29.91	10-14歳_32%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	9.36	5%増	-	10-19歳_21%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第5週のコメント

～ デング熱 ～　海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

デング熱

デング熱は、ネッタイシマカやヒトスジシマカなどの蚊によって媒介されるデングウイルスの感染症である。比較的軽症型のデング熱と、重症型のデング出血熱がある。熱帯・亜熱帯地域、特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1億人がデング熱を発症する。海外渡航で感染し国内で発症する例（輸入症例）が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例により持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発症し、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることあ

デング熱について（厚生労働省）
デング熱とは(国立感染症研究所)

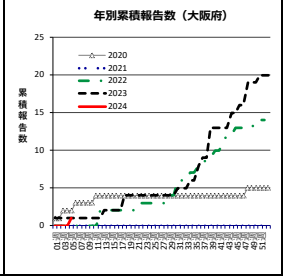


表２．大阪府全数報告数（2024年 第5週1月29日～2月4日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1		12
４類感染症	Ａ型肝炎	1						1				1
	デング熱	1								1		1
	レジオネラ症（肺炎型）	1								1		11
５類感染症	アメーバ赤痢	1				1						3
	ウイルス性肝炎	1					1					3
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2					1			1		16
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1							1			8
	後天性免疫不全症候群	1	1									9
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2						1		1		7
	侵襲性肺炎球菌感染症	4			1					3		31
	梅毒	10			1			1	1	7		105
	百日咳	1							1			4
結核（2023年12月分）	結核　新登録患者数：128名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　41名）（府内累積報告数　1,159名、内　肺・喀痰塗抹陽性　401名）											

（2024年2月6日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第6週（2月5日～2月11日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 高水準で続く」

第6週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は　2,630例であり、前週比　5.4%減であった。

定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、手足口病、RSウイルス感染症の順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ　7.28、4.28、0.52、0.42、0.34である。

感染性胃腸炎は前週比　12%減の1,442例で、南河内11.69、堺市9.00、三島8.18、大阪市北部7.93、中河内7.70であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%増の848例で、大阪市南部6.67、堺市5.47、北河内5.32である。

咽頭結膜熱は34%増の102例で、南河内0.94、北河内0.84、泉州0.76であった。

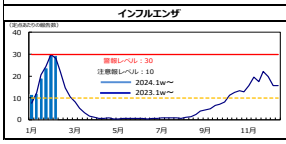
手足口病は25%減の83例で、泉州1.19、三島0.71、大阪市南部0.56である。

RSウイルス感染症は31%増の68例で、南河内0.69、堺市0.63、大阪市北部0.57であった。

インフルエンザは7例増の9,076例で定点あたり報告数は29.56である。大阪市西部43.07、南河内42.21、堺市34.17、泉州33.32、大阪市北部32.20であった。7ブロックで警報レベル30を超えていた。10歳代で報告数が減少していた。

新型コロナウイルス感染症は16%減の2,400例で定点あたり報告数は7.82である。南河内12.17、北河内9.07、堺市9.00、大阪市北部7.95、大阪市南部7.48であった。全ブロックで減少した。全報告数は2023年45週以来初めて減少したが、70歳以上の年齢層では報告数が増加した。

インフルエンザ



新型コロナウイルス感染症

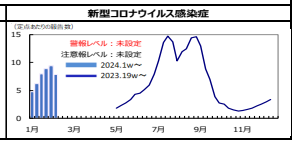


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第6週2月5日～2月11日）

第6週の順位	第5週の順位	感染症	2024年第6週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第6週の定点あたり報告数	2024年第6週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	7.28	12%減	6.51	１歳_14%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4.28	4%増	0.46	10-14歳_15%
3	4	咽頭結膜熱	0.52	34%増	0.12	３歳_23%
4	3	手足口病	0.42	25%減	0.09	２歳_34%
5	6	RSウイルス感染症	0.34	31%増	0.15	１歳未満_35%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	29.56		28.12	10-14歳_30%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	7.82	16%減	-	10-19歳_17%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第6週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～　大阪府では、毎年2-4例の報告があります。

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌（*Neisseria meningitidis*）による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜刺激症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群（DIC）を呈する。髄膜炎ベルト（meningitis belt）とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、ペニシリン系抗菌薬と第三世代セフェム系抗菌薬が有効である。患者との接触者には、緊急に、リファンピシンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌（血清型A、C、Y、W-135）ワクチンの任意接種が開始されている。

侵襲性髄膜炎菌感染症について（厚生労働省）
髄膜炎菌性髄膜炎とは（国立感染症研究所）

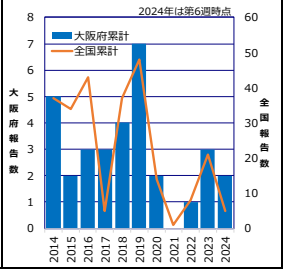


表２．大阪府全数報告数（2024年 第6週2月5日～2月11日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1		14
４類感染症	Ｅ型肝炎	1	1									1
	レジオネラ症（肺炎型）	2	1							1		14
	レジオネラ症（ポンティアック型）	1								1		
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1			1							18
	急性脳炎	2							2			5
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1		10
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1								1		2
	侵襲性肺炎球菌感染症	1		1								33
	水痘（入院例）	1				1						2
	梅毒	7								7		132
結核（2023年12月分）	結核　新登録患者数：128名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　41名）（府内累積報告数　1,159名、内　肺・喀痰塗抹陽性　401名）											

（2024年2月13日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第7週（2月12日～2月18日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ･新型コロナウイルス感染症 今後の動向に注意」

第7週の小児科･眼科定点疾患の報告数の総計は2,090例であり、前週比20.5%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、咽頭結膜熱、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.87、2.87、0.54、0.42、0.38である。

感染性胃腸炎は前週比19%減の1,163例で、南河内9.31、三島7.71、北河内7.12、中河内7.05、堺市6.53であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は33%減の569例で、北河内4.08、大阪市西部3.90、南河内3.88である。

手足口病は29%増の107例で、泉州1.57、中河内1.00、大阪市南部0.72であった。

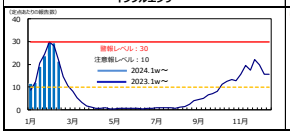
咽頭結膜熱は18%減の84例で、北河内1.00、泉州･大阪市北部0.57である。

RSウイルス感染症は10%増の75例で、堺市0.95、北河内0.60、南河内0.50であった。

インフルエンザは28%減の6,574例で、定点あたり報告数は21.41である。大阪市西部37.00、南河内31.92、大阪市北部25.80、北河内24.20、堺市23.83であった。全ブロックで減少した。

新型コロナウイルス感染症は18%減の1,958例で定点あたり報告数は6.38である。南河内9.17、北河内7.20、大阪市南部6.67、堺市6.62、泉州6.59であった。２週連続で減少した。

インフルエンザ



新型コロナウイルス感染症

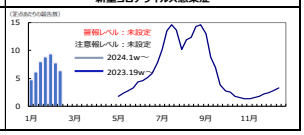


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2024年 第7週2月12日～2月18日）

第7週の順位	第6週の順位	感染症	2024年第7週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第7週の定点あたり報告数	2024年第7週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.87	19%減	6.64	２歳_12%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.87	33%減	0.41	10-14歳_14%
3	4	手足口病	0.54	29%増	0.07	１歳_42%
4	3	咽頭結膜熱	0.42	18%減	0.12	２歳_19%
5	5	RSウイルス感染症	0.38	10%増	0.21	１歳未満_32%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	21.41	28%減	22.04	10-14歳_29%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	6.38	18%減	-	10-19歳_14%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の『令和2年11月2日以降(大阪府)』の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の『新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)』の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第7週のコメント

～劇症型溶血性レンサ球菌感染症～　国内では、毎年400-500例報告されているが、2023年は941例（2024年1月5日現在）報告されており、致死率の高い感染症である

全数把握感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、主にA群溶血性レンサ球菌（*Streptococcus pyogenes*）による感染症である。国内では、毎年400-500例報告されており、約30%が死亡している。極めて致死率の高い感染症である。病状の進行が非常に急激かつ劇的で、発病後数十時間以内には軟部組織壊死、急性腎不全、成人型呼吸窮迫症候群、播種性血管内凝固症候群、多臓器不全を引き起こし、ショック状態から死に至ることがある。治療は、ペニシリン等の抗菌薬の投与と壊死に陥った軟部組織の切除が必要である。大阪府における2023年の報告数は過去10年で2番目に高かった。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症（大阪府感染症情報センター）
劇症型溶血性レンサ球菌感染症とは(国立感染症研究所)

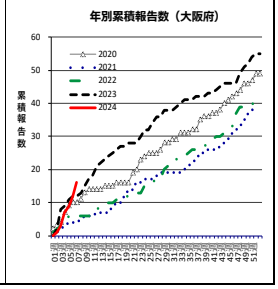


表２．大阪府全数報告数（2024年 第7週2月12日～2月18日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2								2		18
５類感染症	ウイルス性肝炎	1								1		6
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2	2									20
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	4				2					2	16
	後天性免疫不全症候群	4									4	16
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1									1	8
	侵襲性肺炎球菌感染症	3	1								2	40
	梅毒	4			1						3	159
結核（2023年12月分）	結核　新登録患者数：128名　（内　肺･喀痰塗抹陽性　41名）（府内累積報告数　1,159名、内　肺･喀痰塗抹陽性　401名）											

（2024年2月20日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第8週（2月19日～2月25日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 増加」

第8週の小児科･眼科定点疾患の報告数の総計は2,114例であり、前週比1.1%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.65、3.02、0.66、0.56、0.36である。

感染性胃腸炎は前週比4%減の1,118例で、三島8.12、南河内7.81、北河内7.16、大阪市北部6.57、堺市5.95であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%増の597例で、堺市4.63、北河内4.44、泉州3.29である。

RSウイルス感染症は75%増の131例で、南河内1.44、大阪市北部1.21、北河内1.12であった。

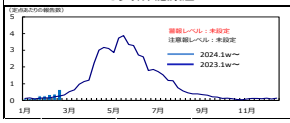
手足口病は4%増の111例で、泉州2.19、大阪市北部1.00、大阪市南部0.94である。

咽頭結膜熱は15%減の71例で、泉州0.71、大阪市北部･北河内0.64であった。

インフルエンザは37%減の4,117例で、定点あたり報告数は13.41である。南河内20.08、大阪市西部19.40、大阪市北部16.20、堺市15.86、北河内14.90である。先週に引き続き全ブロックで減少した。国内ではB型ビクトリア系統が多く検出されている。

新型コロナウイルス感染症は21%減の1,540例で定点あたり報告数は5.02である。大阪市北部6.80、南河内6.29、北河内5.68、大阪市南部5.63、堺市5.41であった。3週連続で減少した。

RSウイルス感染症



インフルエンザ

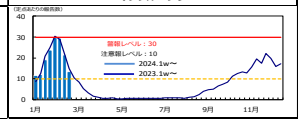


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2024年 第8週2月19日～2月25日）

第8週の順位	第7週の順位	感染症	2024年第8週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第8週の定点あたり報告数	2024年第8週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.65	4%減	5.72	10-14歳_11%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.02	5%増	0.35	５歳_13%
3	5	RSウイルス感染症	0.66	75%増	0.27	１歳未満_34%
4	3	手足口病	0.56	4%増	0.04	１歳_40%
5	4	咽頭結膜熱	0.36	15%減	0.09	３歳_20%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	13.41	37%減	14.74	10-14歳_27%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	5.02	21%減	-	80歳以上_12%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の『令和2年11月2日以降(大阪府)』の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の『新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)』の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第8週のコメント

～侵襲性肺炎球菌感染症～　大阪府では、コロナ禍前の2019年までは毎年250例以上の報告がありました

全数把握感染症

侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、感染症法上、肺炎球菌（*Streptococcus pneumoniae*）による感染症のうち、この菌が髄液又は血液等の無菌部位から検出された感染症のことをいう。髄膜炎、菌血症を伴う肺炎、敗血症など特に問題とされており、小児および高齢者を中心に患者報告がある。抗菌薬が有効であるが、近年薬剤耐性菌も多く報告されている。侵襲性肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効である。小児および高齢者への定期接種が実施されており、また、64歳以下で肺炎球菌による重症化の危険性が高い人への接種が重要である。

侵襲性肺炎球菌感染症（大阪府感染症情報センター）
肺炎球菌感染症（高齢者）（厚生労働省）
肺炎球菌感染症（高齢者）（国立感染症研究所）

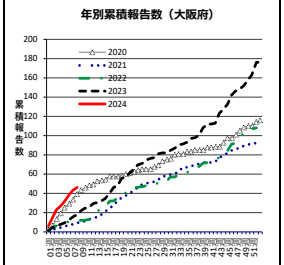


表２．大阪府全数報告数（2024年 第8週2月19日～2月25日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
４類感染症	テング熱	1							1			2
５類感染症	アメーバ赤痢	1		1								6
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3		1						2		26
	急性脳炎	1		1								6
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2		1		1						18
	後天性免疫不全症候群	1									1	17
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1									1	9
	侵襲性肺炎球菌感染症	3				1	2					46
	梅毒	8	1		1		3		1	2		189
	百日咳	1							1			6
結核（2023年12月分）	結核　新登録患者数：128名　（内　肺･喀痰塗抹陽性　41名）（府内累積報告数　1,159名、内　肺･喀痰塗抹陽性　401名）											

（2024年2月27日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第9週（2月26日～3月3日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 増加続く」

第9週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,271例であり、前週比7.4%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.92、3.06、1.02、0.48、0.44である。

感染性胃腸炎は前週比5%増の1,173例で、南河内8.13、三島8.12、大阪市南部7.39、中河内6.90、北河内6.12であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%増の606例で、大阪市南部5.28、堺市4.26、北河内3.76である。

RSウイルス感染症は53%増の201例で、大阪市北部2.00、北河内・南河内1.44であった。２週連続で増加しており、9ブロックで前週を上回った。今後の動向に注意が必要である。

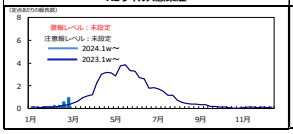
手足口病は14%減の96例で、泉州1.33、中河内0.95、大阪市南部0.78であった。

流行性角結膜炎は44%増の23例で、南河内1.25、大阪市東部1.17、泉州0.67である。

インフルエンザは33%減の2,747例で、定点あたり報告数は8.95であった。南河内14.58、大阪市西部11.67、大阪市北部11.60、中河内10.74、堺市9.55である。2月のウイルス検出状況では、AH1pdmが5%、AH3が21%、B型ビクトリア系統が74%を占めている。

新型コロナウイルス感染症は5%減の1,470例で定点あたり報告数は4.79であった。大阪市北部6.45、堺市5.69、大阪市東部5.64、大阪市南部5.30、泉州5.09である。4週連続で減少した。

RSウイルス感染症



感染性胃腸炎

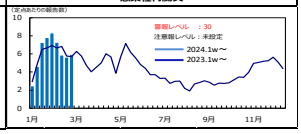


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第9週2月26日～3月3日）

第9週の順位	第8週の順位	感染症	2024年第9週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第9週の定点あたり報告数	2024年第9週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.92	5%増	5.71	10-14歳_12%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.06	2%増	0.47	10-14歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	1.02	53%増	0.32	１歳未満_34%
4	4	手足口病	0.48	14%減	0.04	１歳_35%
5	6	流行性角結膜炎	0.44	44%増	0.06	20歳以上_83%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	8.95	33%減	10.39	10-14歳_25%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	4.79	5%減	-	10-19歳_12%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。

詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。

詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。

2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第9週のコメント

～麻しん～　ワクチンで予防可能な感染症です。2024年第8週での全国の年間累積感染者数は2例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん（はしか）は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発しん性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発しんが出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力（一人の患者が12～18人に感染伝播）のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状（発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等）があり、１）１か月以内に麻しん患者と接触していた場合、２）麻しん流行国（主にアジア及びアフリカ諸国）に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン（1歳以上で2回）で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

麻しん情報（大阪府感染症情報センター）
麻疹とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数

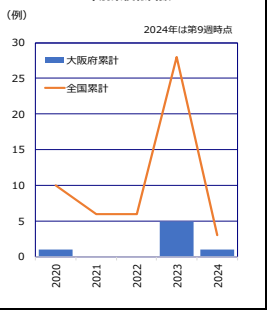


表２．大阪府全数報告数（2024年 第9週2月26日～3月3日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1		20
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2			1					1		16
５類感染症	アメーバ赤痢	1								1		7
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1								1		28
	急性脳炎	1					1					7
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2					2					20
	後天性免疫不全症候群	1								1		20
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2			1					1		11
	侵襲性肺炎球菌感染症	3	1			1				1		50
	梅毒	22		1	2				5	14		230
	百日咳	2	1							1		9
	麻しん	1				1						1
結核（2023年12月分）	結核　新登録患者数：128名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　41名）（府内累積報告数　1,159名、内　肺・喀痰塗抹陽性　401名）											

（2024年3月5日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第10週（3月4日～3月10日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 さらに増加」

第10週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,490例であり、前週比9.6%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.20、3.58、1.55、0.43、0.41である。

感染性胃腸炎は前週比5%増の1,228例で、北河内8.08、三島8.06、泉州7.10、大阪市南部6.89、南河内6.88であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は17%増の709例で、堺市5.68、南河内4.75、大阪市南部4.33である。

RSウイルス感染症は53%増の307例で、北河内2.64、大阪市北部2.36、堺市2.21であった。第6週以降、増加が見られており、今後の動向には注意が必要である。

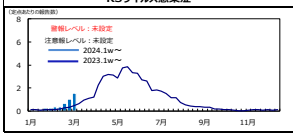
手足口病は11%減の85例で、泉州1.29、中河内0.65、南河内0.63であった。

咽頭結膜熱は2%減の82例で、南河内0.88、泉州0.81、大阪市北部・北河内0.64である。

インフルエンザは11%減の2,439例で、定点あたり報告数は7.94であった。南河内12.75、大阪市北部10.70、大阪市西部8.80、堺市8.66、北河内8.05であり、5週連続で減少している。

新型コロナウイルス感染症は9%減の1,333例で、定点当たり報告数は4.34であった。泉州5.71、南河内5.21、堺市5.10、大阪市東部5.05、北河内4.63であり、5週連続で減少している。

RSウイルス感染症



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

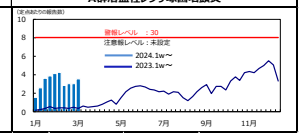


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第10週3月4日～3月10日）

第10週の順位	第9週の順位	感染症	2024年第10週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第10週の定点あたり報告数	2024年第10週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	6.20	5%増	5.98	１歳_12%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.58	17%増	0.49	６歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	1.55	53%増	0.52	１歳未満_31%
4	4	手足口病	0.43	11%減	0.02	１歳_35%
5	6	咽頭結膜熱	0.41	2%減	0.08	１歳, ２歳_16%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	7.94	11%減	8.27	10-14歳_27%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	4.34	9%減	-	10-19歳_14%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。

詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。

詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。

2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第10週のコメント

～麻しん～　ワクチンで予防可能な感染症です。大阪府内の麻しんの発生動向について、第10週（3月4日-3月10日）に1例、2024年の累積報告数は2例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん（はしか）は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発しん性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発しんが出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力（一人の患者が12～18人に感染伝播）のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状（発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等）があり、１）１か月以内に麻しん患者と接触していた場合、２）麻しん流行国（主にアジア、欧州及びアフリカ諸国）や地域へ最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン（1歳以上で2回）で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

麻しん情報（大阪府感染症情報センター）
麻疹とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数

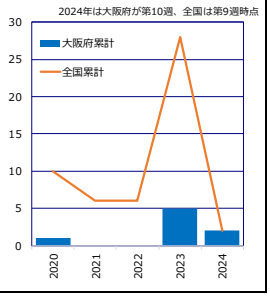


表２．大阪府全数報告数（2024年 第10週3月4日～3月10日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1			1							17
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1		1								31
	クリプトスポリジウム症	1								1		1
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1		1								12
	侵襲性肺炎球菌感染症	3					1	1		1		53
	水痘（入院例）	1			1							4
	梅毒	21				1	1	2	4	13		282
	百日咳	1								1		10
	麻しん	1						1				2
結核（2024年1月分）	結核　新登録患者数：76名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）（府内累積報告数　76名、内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）											

（2024年3月12日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第11週（3月11日～3月17日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 引き続き増加」

第11週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,474例であり、前週比0.6%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.05、3.32、1.84、0.53、0.36である。

感染性胃腸炎は前週比3%減の1,197例で、三島8.18、中河内8.05、南河内7.38、北河内7.04、泉州6.57であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は7%減の658例で、堺市6.05、大阪市南部4.33、北河内4.04である。

RSウイルス感染症は19%増の365例で、大阪市北部3.14、北河内2.80、堺市2.53であった。6週連続で増加しており、8ブロックで前週を上回った。

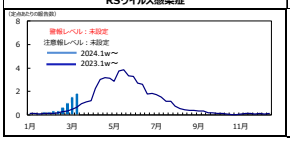
手足口病は22%増の104例で、泉州1.76、中河内0.75、堺市0.63である。

咽頭結膜熱は12%減の72例で、泉州0.67、南河内0.63、豊能0.57であった。

インフルエンザは18%減の2,010例で、定点あたり報告数は6.55である。大阪市西部9.33、南河内8.71、堺市8.31、中河内7.26、三島7.07であり、6週連続で減少している。

新型コロナウイルス感染症は11%減の1,181例で、定点当たり報告数は3.85であった。堺市5.07、大阪市東部5.05、南河内4.58、泉州4.50、大阪市北部4.10であり、6週連続で減少している。

RSウイルス感染症



A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

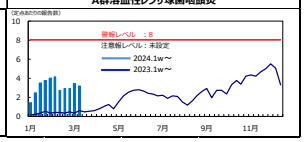


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第11週3月11日～3月17日）

第11週の順位	第10週の順位	感染症	2024年第11週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第11週の定点あたり報告数	2024年第11週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	6.05	3%減	5.66	５歳,10-14歳_11%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.32	7%減	0.64	５歳_15%
3	3	RSウイルス感染症	1.84	19%増	0.62	１歳_29%
4	4	手足口病	0.53	22%増	0.06	１歳_37%
5	5	咽頭結膜熱	0.36	12%減	0.15	１歳_22%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	6.55	18%減	5.21	10-14歳_28%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	3.85	11%減	-	10-19歳,80歳以上_13%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第11週のコメント

～麻しん～　ワクチンで予防可能な感染症です。大阪府内の麻しんの発生動向について、第11週（3月11日-3月17日）に5例、2024年の累積報告数は7例です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん（はしか）は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発しん性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発しんが出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力（一人の患者が12～18人に感染伝播）のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、欧州やアフリカで麻しんが流行している。症状（発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等）がある、１）１か月以内に麻しん患者と接触していた場合、２）麻しん流行国（主にアジア、欧州及びアフリカ諸国）に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン（1歳以上で2回）で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

麻しん情報（大阪府感染症情報センター）
麻疹とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数

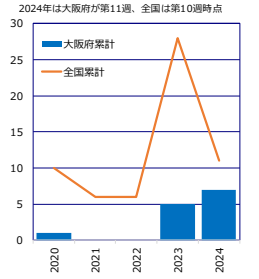


表２．大阪府全数報告数（2024年 第11週3月11日～3月17日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	**腸管出血性大腸菌感染症**	1			1							21
４類感染症	**デング熱**	1								1		3
	レジオネラ症（肺炎型）	1								1		18
５類感染症	**ウイルス性肝炎**	1					1					8
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1							1			26
	侵襲性肺炎球菌感染症	2		1					1			56
	水痘（入院例）	1								1		5
	梅毒	11	1		1	3		1		5		315
	播種性クリプトコックス症	1								1		2
	麻しん	5			1	1			1	2		7
結核（2024年1月分）	**結核　新登録患者数：76名**　（内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）（府内累積報告数　76名、内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）											

（2024年3月19日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第12週（3月18日～3月24日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 増加続く」

第12週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,284例であり、前週比7.7%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.08、3.08、2.23、0.36、0.35である。

感染性胃腸炎は前週比16%減の1,005例で、三島8.18、北河内6.12、大阪市北部5.93、中河内5.75、泉州5.38であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は7%減の609例で、北河内・大阪市南部4.00、堺市3.79である。

RSウイルス感染症は21%増の441例で、大阪市北部3.71、南河内3.25、北河内3.24であった。7週連続で増加している。

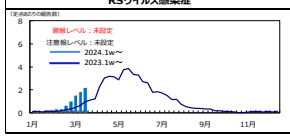
咽頭結膜熱は1%減の71例で、南河内1.06、泉州0.86、大阪市北部0.57である。

手足口病は34%減の69例で、泉州0.67、南河内0.56、三島0.53であった。

インフルエンザは23%減の1,539例で、定点あたり報告数は5.01である。三島6.26、南河内6.21、大阪市西部6.13、堺市5.86、豊能5.38であり、7週連続で減少している。

新型コロナウイルス感染症は7%減の1,101例で、定点あたり報告数は3.59であった。堺市4.69、泉州4.35、南河内4.29、豊能4.22、大阪市北部3.65であり、7週連続で減少している。

RSウイルス感染症



インフルエンザ

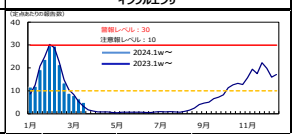


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第12週3月18日～3月24日）

第12週の順位	第11週の順位	感染症	2024年第12週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第12週の定点あたり報告数	2024年第12週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.08	16%減	4.74	１歳_12%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.08	7%減	0.51	10-14歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	2.23	21%増	0.96	１歳未満_32%
4	5	咽頭結膜熱	0.36	1%減	0.22	１歳_18%
5	4	手足口病	0.35	34%減	0.07	１歳_32%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	5.01	23%減	3.21	10-14歳_33%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	3.59	7%減	-	10-19歳_12%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第12週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期についで多く、全国では2021年7,873例、2022年13,226例、2023年度14,906例と増加している

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の年間報告数は、2020年5,867例、2021年7,978例、2022年13,226例、2023年は過去最高の14,906例と増加している。大阪府においても、2023年は2,019例で現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒とは（国立感染症研究所）
梅毒（大阪府感染症情報センター）

年別累積報告数（大阪府）

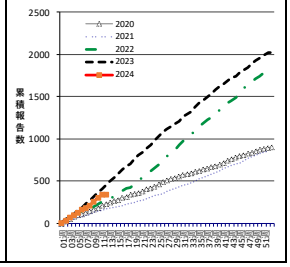


表２．大阪府全数報告数（2024年 第12週3月18日～3月24日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
４類感染症	**レジオネラ症（肺炎型）**	2	1	1								20
５類感染症	**急性脳炎**	1							1			8
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2		1	1							15
	侵襲性肺炎球菌感染症	3	1	1				1				60
	梅毒	2									2	342
結核（2024年1月分）	**結核　新登録患者数：76名**　（内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）（府内累積報告数　76名、内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）											

（2024年3月26日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第13週（3月25日～3月31日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　8週連続で増加」

第13週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,206例であり、前週比3.4%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.69、2.63、2.53、0.55、0.43である。

感染性胃腸炎は前週比8%減の928例で、南河内6.75、大阪市北部5.57、北河内5.44、中河内5.35、三島5.18であった。

RSウイルス感染症は18%増の520例で、大阪市北部5.36、南河内3.56、北河内3.52である。10ブロックで増加していた。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は18%減の501例で、北河内3.92、大阪市南部3.50、南河内3.06であった。

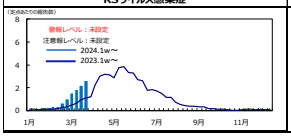
手足口病は58%増の109例で、大阪市南部1.11、泉州1.00、中河内0.65である。

流行性角結膜炎は22%増の22例で、南河内1.25、大阪市東部1.17、豊能0.75であった。

インフルエンザは19%減の1,254例で、定点あたり報告数は4.08である。堺市5.21、大阪市西部5.13、南河内4.96、三島4.78、北河内4.71であり、8週連続で減少している。

新型コロナウイルス感染症は5例増加の1,106例で、定点あたり報告数は3.60であった。北河内4.61、大阪市南部4.00、堺市3.97、大阪市北部3.95、南河内3.92であり、第12週まで7週続いていた減少が止まった。

RSウイルス感染症



新型コロナウイルス感染症

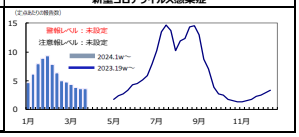


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第13週3月25日～3月31日）

第13週の順位	第12週の順位	感染症	2024年第13週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第13週の定点あたり報告数	2024年第13週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.69	8%減	4.01	3歳_11%
2	3	RSウイルス感染症	2.63	18%増	1.12	1歳未満_33%
3	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.53	18%減	0.57	4歳_15%
4	5	手足口病	0.55	58%増	0.04	1歳_34%
5	6	流行性角結膜炎	0.43	22%増	0.12	20歳以上_64%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	4.08	19%減	1.69	10-14歳_23%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	3.60	増減なし	-	80歳以上_14%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第13週のコメント

～侵襲性肺炎球菌感染症～　大阪府では、コロナ禍前の2019年までは毎年250例以上の報告がありました

全数把握感染症

侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、感染症法上、肺炎球菌（*Streptococcus pneumoniae*）による感染症のうち、この菌 が髄液又は血液等の無菌部位から検出された感染症のことをいう。髄膜炎、菌血症を伴う肺炎、敗血症などが特に問題とされており、小児および高齢者を中心に患者報告がある。抗菌薬が有効であるが、近年薬剤耐性菌も多く報告されている。侵襲性肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効である。小児および高齢者への定期接種が実施されており、また、64歳以下で肺炎球菌による重症化の危険性が高い人への接種が重要である。

侵襲性肺炎球菌感染症（大阪府感染症情報センター）
肺炎球菌感染症（高齢者）（厚生労働省）
肺炎球菌感染症（高齢者）（国立感染症研究所）

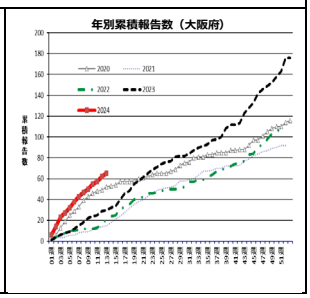


表２．大阪府全数報告数（2024年 第13週3月25日～3月31日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1								1	22
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2			1				1		38
	後天性免疫不全症候群	1				1					22
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1			1						16
	侵襲性肺炎球菌感染症	3	1		1		1				65
	梅毒	5	1		1					3	357
結核（2024年1月分）	結核　新登録患者数：76名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）（府内累積報告数　76名、内　肺・喀痰塗抹陽性　30名）										

（2024年4月2日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第14週（4月1日～4月7日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症　増加続く」

第14週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,210例であり、前週比0.2%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.09、3.39、2.52、0.48、0.34である。

感染性胃腸炎は前週比14%減の802例で、中河内6.45、南河内5.31、三島5.06、大阪市北部4.64、豊能4.55であった。

RSウイルス感染症は28%増の665例で、大阪市北部7.36、中河内5.35、南河内4.63であり、9週連続で増加している。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%減の494例で、堺市4.89、大阪市南部3.83、北河内3.12であった。

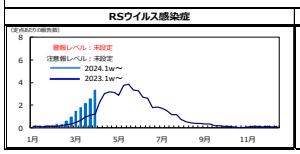
手足口病は14%減の94例で、泉州1.10、中河内0.80、大阪市南部0.72である。

咽頭結膜熱は25%増の66例で、南河内1.19、泉州0.48、中河内0.45であった。

インフルエンザは54%減の578例で、定点あたり報告数は1.90である。大阪市西部2.87、堺市2.79、南河内2.67、中河内2.29、泉州1.91であり、9週連続で減少している。

新型コロナウイルス感染症は10%減の992例で、定点あたり報告数は3.26である。大阪市北部3.80、北河内3.78、大阪市東部3.77、泉州3.74、堺市3.72である。

RSウイルス感染症



感染性胃腸炎

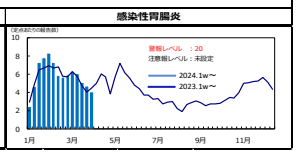


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第14週4月1日～4月7日）

第14週の順位	第13週の順位	感染症	2024年第14週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第14週の定点あたり報告数	2024年第14週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.09	14%減	4.44	2歳_11%
2	2	RSウイルス感染症	3.39	28%増	1.18	1歳未満_31%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.52	1%減	0.63	5歳_15%
4	4	手足口病	0.48	14%減	0.03	1歳_29%
5	6	咽頭結膜熱	0.34	25%増	0.28	2歳_24%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	1.90	54%減	1.15	20歳以上_25%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	3.26	10%減	-	80歳以上_12%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第14週のコメント

～腸チフス～　手洗いの徹底と、十分に加熱された飲食物を摂取することが重要である

全数把握感染症

腸チフス

腸チフスはチフス菌を起因病原体とする全身性の感染症であり、患者や保菌者の便と尿が感染源となる。
通常、7～14日（報告によって3～60日）の潜伏期間を経て、発熱、頭痛、食欲不振及び全身倦怠感などの症状を発症する。また、39℃を超える高熱が1週間以上続き、比較的徐脈、バラ疹、脾腫、下痢などの症状を呈し、腸出血、腸穿孔が生じることがある。重症例では、意識障害や難聴が起きることもある。
治療は、抗菌薬投与が効果的である。南アジアなどで、薬剤耐性菌も多く報告されていることから、処方された期間で適切に服用する必要がある。5～10%の症例で再発がみられる。

腸チフス・パラチフスとは（国立感染症研究所）
腸チフス・パラチフス（厚生労働省 検疫所）

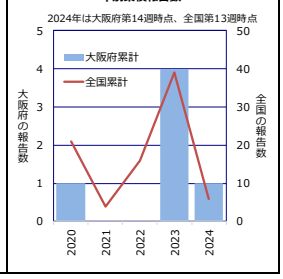


表２．大阪府全数報告数（2024年 第14週4月1日～4月7日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1					1				23
	腸チフス	1								1	1
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2				1				1	24
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2			1					1	43
	クリプトスポリジウム症	1							1		3
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3			1		1			1	35
	後天性免疫不全症候群	1								1	25
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1						1			17
	侵襲性肺炎球菌感染症	1								1	68
	梅毒	22						2	3	17	422
	百日咳	1							1		11
結核（2024年2月分）	結核　新登録患者数：41名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　19名）（府内累積報告数　118名、内　肺・喀痰塗抹陽性　49名）										

（2024年4月9日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第15週（4月8日～4月14日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 10週連続増加」

第15週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,571例であり、前週比16.3%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.63、3.95、2.58、0.81、0.65である。

感染性胃腸炎は前週比13%増の908例で、中河内5.85、北河内5.64、南河内5.50、三島5.44、大阪市西部5.00であった。

RSウイルス感染症は16%増の774例で、大阪市北部6.86、中河内5.40、堺市5.00であり、10週連続で増加している。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%増の506例で、北河内3.76、堺市3.63、中河内3.30であった。

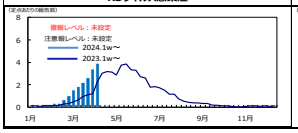
手足口病は69%増の159例で、泉州2.24、堺市1.26、大阪市南部1.00である。

流行性角結膜炎は94%増の33例で、三島1.75、大阪市南部1.50、大阪市北部1.00であった。

インフルエンザは32%減の391例で、定点あたり報告数は1.29である。堺市1.79、大阪市北部1.75、中河内1.55、大阪市西部1.40、北河内1.33であり、10週連続で減少している。

新型コロナウイルス感染症は9%減の900例で、定点あたり報告数は2.96であった。泉州3.94、大阪市北部3.70、北河内3.53、南河内3.17、堺市3.14である。

RSウイルス感染症



感染性胃腸炎

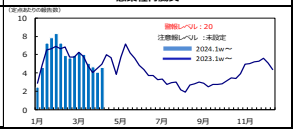


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第15週4月8日～4月14日）

第15週の順位	第14週の順位	感染症	2024年第15週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第15週の定点あたり報告数	2024年第15週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.63	13%増	4.92	１歳_14%
2	2	RSウイルス感染症	3.95	16%増	2.21	１歳_38%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.58	2%増	0.80	４歳_13%
4	4	手足口病	0.81	69%増	0.11	１歳_43%
5	6	流行性角結膜炎	0.65	94%増	0.14	20歳以上_64%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	1.29	32%減	0.78	20歳以上_19%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.96	9%減	-	50-59歳_11%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。
突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第15週のコメント

～日本紅斑熱～ 大阪府では2023年9例の報告があった。2024年は第15週で1例目が報告されている

全数把握感染症

日本紅斑熱

日本紅斑熱は、紅斑熱群リケッチアの一種 *Rickettsia japonica* を起因病原体とし、野山でマダニに刺咬されることにより感染する。媒介ダニの活動が活発化する４月～10月に発生し、特に9月、10月は多い。自然界で保菌あるいは感染する動物として、げっ歯類、野生のシカ、イノシシなどがあげられる。潜伏期は2～8日であり、頭痛、発熱、倦怠感を伴って発症する。発熱、発しん、刺し口が主要三徴候であるが、必ずしも、刺し口があるとは限らない。発しんは、体幹部より四肢末端部に強く出現し、検査所見では、肝逸脱酵素の上昇、血小板の減少が認められる。治療には、抗菌薬投与が効果的であり、第一選択薬はテトラサイクリン系の抗菌薬である。β-ラクタム系の抗菌薬は全く無効である。

日本紅斑熱(大阪健康安全基盤研究所)
日本紅斑熱とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数

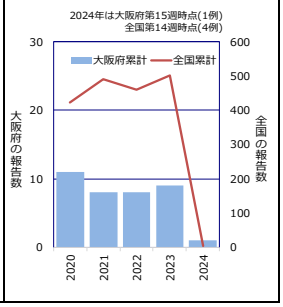


表２．大阪府全数報告数（2024年 第15週4月8日～4月14日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1			1							24
４類感染症	日本紅斑熱	1	1									1
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3			1					2		47
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1		37
	後天性免疫不全症候群	1								1		28
	ジアルジア症	1								1		1
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1		19
	侵襲性肺炎球菌感染症	7				2				5		76
	水痘（入院例）	1								1		6
	梅毒	15			2	1					12	451
	百日咳	2			2							13
結核（2024年2月分）	結核　新登録患者数：41名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　19名）（府内累積報告数　118名、内　肺・喀痰塗抹陽性　49名）											

（2024年4月16日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第16週（4月15日～4月21日）

今週のコメント

～Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎～　咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加」

第16週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,984例であり、前週比16.1%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、流行性角結膜炎の順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.09、4.41、3.53、1.07、0.51である。

感染性胃腸炎は前週比10%増の998例で、三島6.63、中河内6.50、大阪市南部6.39、泉州5.67、南河内5.38であった。

RSウイルス感染症は12%増の865例で、大阪市北部12.71、大阪市東部5.67、大阪市西部4.50である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は37%増の691例で、大阪市南部6.39、北河内5.32、南河内4.63であった。

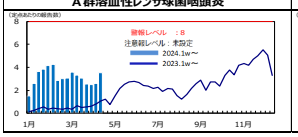
手足口病は31%増の209例で、泉州2.67、中河内1.45、大阪市南部1.28である。

流行性角結膜炎は21%減の26例で、豊能1.75、大阪市南部1.25、大阪市北部0.80であった。

インフルエンザは20%減の314例で定点あたり報告数は1.03である。中河内2.00、大阪市北部1.30、三島1.04、北河内1.03、泉州0.97であった。

新型コロナウイルス感染症は8%増の974例で定点あたり報告数は3.20である。泉州3.82、北河内3.75、大阪市北部3.65、大阪市南部3.44、南河内3.42であった。5歳から19歳までの年齢階層で増加した。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎



RSウイルス感染症

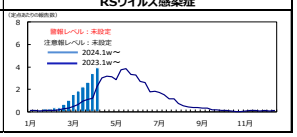


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第16週4月15日～4月21日）

第16週の順位	第15週の順位	感染症	2024年第16週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第16週の定点あたり報告数	2024年第16週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.09	10%増	5.83	１歳_13%
2	2	RSウイルス感染症	4.41	12%増	2.92	１歳_33%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.53	37%増	1.09	４歳_14%
4	4	手足口病	1.07	31%増	0.16	１歳_49%
5	6	流行性角結膜炎	0.51	21%減	0.33	20歳以上_65%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	1.03	20%減	0.78	20歳以上_21%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	3.20	8%増	-	10-19歳_16%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。
突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第16週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～　2023年、大阪府では、3例報告された。

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌（*Neisseria meningitidis*）による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜刺激症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群（DIC）を呈する。髄膜炎ベルト（meningitis belt）とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、ペニシリン系抗菌薬と第三世代セフェム系抗菌薬が有効である。患者との接触者には、緊急に、リファンピシン、シプロフロキサシンやセフトリアキソンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌（血清型A、C、Y、W-135）ワクチンの任意接種が開始されている。

髄膜炎菌性髄膜炎とは（国立感染症研究所）
侵襲性髄膜炎菌感染症について（厚生労働省）

年別累積報告数

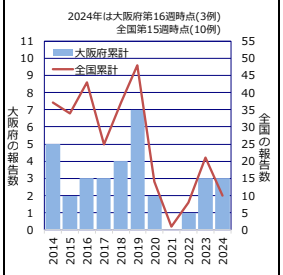


表２．大阪府全数報告数（2024年 第16週4月15日～4月21日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1			1							25
５類感染症	アメーバ赤痢	1							1			11
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2		1						1		50
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1					1					38
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1							1			21
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1								1		3
	侵襲性肺炎球菌感染症	1				1						80
	梅毒	24				1	2		1	20		499
	百日咳	2								2		17
結核（2024年2月分）	結核　新登録患者数：41名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　19名）（府内累積報告数　118名、内　肺・喀痰塗抹陽性　49名）											

（2024年4月23日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第17週（4月22日～4月28日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 非流行期へ」

第17週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,944例であり、前週比1.3%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.60、3.97、2.98、1.30、0.58である。

感染性胃腸炎は前週比10%増の1,098例で、三島8.56、堺市6.63、中河内6.40、泉州6.38、大阪市南部6.11であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は13%増の778例で、堺市6.11、北河内5.72、南河内5.06である。

RSウイルス感染症は32%減の585例で、大阪市北部7.21、大阪市西部3.50、中河内3.35であった。第5週以降12週間ぶりに減少に転じている。

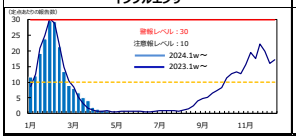
手足口病は22%増の255例で、泉州3.05、堺市1.79、中河内1.50である。年齢別の割合は、1歳で最も高く（45%）、次いで2歳（19%）、6か月以上12か月齢未満（13%）となっている。

流行性角結膜炎は15%増の30例で、大阪市南部1.75、三島・大阪市北部1.00であった。

インフルエンザは29%減の222例で、定点あたり報告数は0.73である。大阪市西部1.80、中河内1.00、泉州0.97、大阪市北部0.80、南河内0.79である。定点あたり報告数が1.0を下回り非流行期に入った。

新型コロナウイルス感染症は17%減の807例で定点あたり報告数は2.65であった。堺市3.31、大阪市北部3.30、南河内3.25、北河内3.05、大阪市東部2.91であった。

インフルエンザ



手足口病

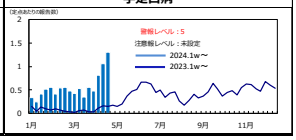


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第17週4月22日～4月28日）

第17週の順位	第16週の順位	感染症	2024年第17週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第17週の定点あたり報告数	2024年第17週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.60	10%増	5.64	１歳_12%
2	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.97	13%増	1.22	10-14歳_13%
3	2	RSウイルス感染症	2.98	32%減	3.11	１歳_34%
4	4	手足口病	1.30	22%増	0.15	１歳_45%
5	5	流行性角結膜炎	0.58	15%増	0.21	20歳以上_60%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.73	29%減	0.82	20歳以上_26%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.65	17%減	-	10-19歳_14%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。
突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。
2023/24年シーズンのインフルエンザ集計は第36週から開始しました。

第17週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期について多く、全国では2021年7,978例、2022年13,221例、2023年度14,906例と増加している

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の年間報告数は、2020年5,867例、2021年7,978例、2022年13,221例、2023年は過去最高の14,906例と増加している。大阪府においても、2023年は2,019例で現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒とは（国立感染症研究所）
梅毒（大阪府感染症情報センター）

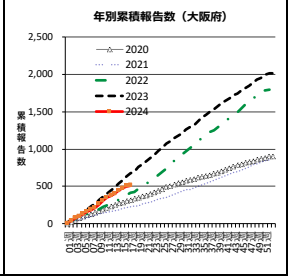


表２．大阪府全数報告数（2024年 第17週4月22日～4月28日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1					1					28
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2		1		1						53
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1				1						40
	侵襲性肺炎球菌感染症	1							1			83
	梅毒	8		1	1	2	2		1	1		511
結核（2024年2月分）	結核　新登録患者数：41名（内　肺・喀痰塗抹陽性　19名）（府内累積報告数　118名、内　肺・喀痰塗抹陽性　49名）											

（2024年4月30日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第18週（4月29日～5月5日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 今後の動向に注目」

第18週の発生動向について報告を行うにあたって、大型連休のための医療機関の診療実日数の減少を考慮する必要がある。

第18週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,857例であり、前週比36.9%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.17、2.32、1.87、1.18、0.40である。

感染性胃腸炎は前週比44%減の618例で、大阪市北部4.21、北河内3.92、大阪市南部3.78、堺市3.63、三島・南河内3.56であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は42%減の452例で、堺市3.79、北河内3.72、大阪市南部3.39である。

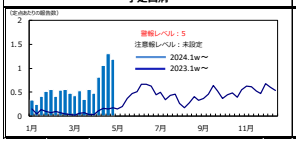
RSウイルス感染症は38%減の365例で、大阪市北部5.93、大阪市西部2.70、中河内2.32であった。

手足口病は9%減の231例で、大阪市北部2.36、南河内1.75、大阪市西部1.70である。

咽頭結膜熱は14%減の78例で、南河内1.19、中河内0.95、大阪市西部0.50であった。

新型コロナウイルス感染症は38%減の501例で、定点あたり報告数は1.65である。大阪市西部2.80、豊能・南河内2.42、北河内1.80、三島1.69であった。

手足口病



感染性胃腸炎

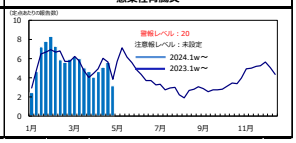


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第18週4月29日～5月5日）

第18週の順位	第17週の順位	感染症	2024年第18週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第18週の定点あたり報告数	2024年第18週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	3.17	44%減	3.86	１歳_12%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.32	42%減	0.79	４歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	1.87	38%減	3.11	１歳未満_34%
4	4	手足口病	1.18	9%減	0.17	１歳_45%
5	6	咽頭結膜熱	0.40	14%減	0.32	１歳_33%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.65	38%減	-	10-19歳_16%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。
詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。
突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、本文には詳細に記載していません。

第18週のコメント

～パラチフス～　手洗いの徹底、十分に加熱された飲食物を摂取することが重要である

全数把握感染症

パラチフス

パラチフスはパラチフスA菌を起因病原体とする全身性の感染症であり、患者や保菌者の便と尿が感染源となる。
通常、7～14日（報告によって3～60日）の潜伏期間を経て、発熱、頭痛、食欲不振及び全身倦怠感などの症状を発症する。また、39℃を超える高熱が1週間以上続き、比較的徐脈、バラ疹、脾腫、下痢などの症状を呈し、腸出血、腸穿孔が生じることがある。重症例では、意識障害や難聴が起きることもある。
治療は、抗菌薬投与が効果的である。南アジアなどで、薬剤耐性菌も多く報告されている。5～10%の症例で再発がみられる。

腸チフス・パラチフスとは（国立感染症研究所）
腸チフス・パラチフス（厚生労働省 検疫所）

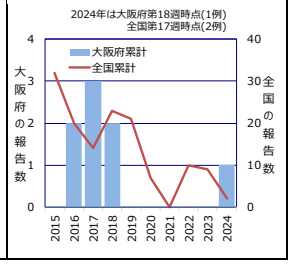


表２．大阪府全数報告数（2024年 第18週4月29日～5月5日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	パラチフス	1								1		1
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1		1								29
	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1					1					
５類感染症	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1		1								43
	侵襲性肺炎球菌感染症	2		1	1							93
	梅毒	2			1					1		543
結核（2024年3月分）	結核　新登録患者数：58名（内　肺・喀痰塗抹陽性　22名）（府内累積報告数　212名、内　肺・喀痰塗抹陽性　91名）											

（2024年5月7日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第19週（5月6日～5月12日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 増加」

第19週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,456例であり、前週比32.3%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.72、2.92、1.77、1.71、0.52である。

感染性胃腸炎は前週比49%増の920例で、三島6.06、南河内5.81、堺市5.74、北河内5.36、中河内5.32であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は26%増の569例で、大阪市南部4.89、南河内4.63、北河内4.12である。

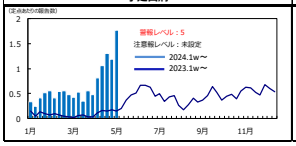
手足口病は50%増の346例で、大阪市北部3.57、南河内2.56、北河内2.48であった。

RSウイルス感染症は8%減の334例で、大阪市北部3.64、中河内2.47、南河内2.31である。

流行性角結膜炎は42%増の27例で、南河内1.50、北河内1.17、豊能1.00であった。

新型コロナウイルス感染症は26%増の631例で、定点あたり報告数は2.08である。南河内2.96、豊能2.53、堺市2.28、大阪市西部2.20、大阪市東部2.18であった。

手足口病



感染性胃腸炎

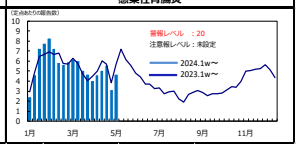


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第19週5月6日～5月12日）

第19週の順位	第18週の順位	感染症	2024年第19週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第19週の定点あたり報告数	2024年第19週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.72	49%増	5.65	10-14歳_13%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.92	26%増	1.53	10-14歳_15%
3	4	手足口病	1.77	50%増	0.15	１歳_40%
4	3	RSウイルス感染症	1.71	8%減	2.79	１歳未満_40%
5	6	流行性角結膜炎	0.52	42%増	0.21	20歳以上_74%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.08	26%増	1.79	20-29歳_13%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。

詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。

詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、

本文には詳細に記載していません。

第19週のコメント

～劇症型溶血性レンサ球菌感染症～　国内では、毎年400-500例報告されているが、2024年は第18週時点で、800例を超えている

全数把握感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、主にA群溶血性レンサ球菌（*Streptococcus pyogenes*）による感染症である。国内では、毎年400-500例報告されており、約30%が死亡している。極めて致死率の高い感染症である。病状の進行が非常に急激かつ劇的で、発病後数十時間以内には軟部組織壊死、急性腎不全、成人型呼吸窮迫症候群、播種性血管内凝固症候群、多臓器不全を引き起こし、ショック状態から死に至ることがある。治療は、ペニシリン等の抗菌薬の投与と壊死に陥った軟部組織の切除が必要である。大阪府における2023年の報告数は過去10年で2番目に高かった。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症（大阪府感染症情報センター）

劇症型溶血性レンサ球菌感染症とは（国立感染症研究所）

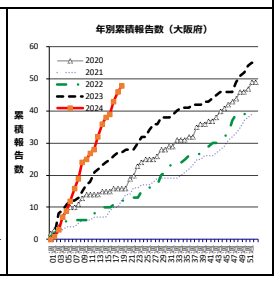


表２．大阪府全数報告数（2024年 第19週5月6日～5月12日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1	32
	腸チフス	1								1	2
４類感染症	日本紅斑熱	1		1							2
	レジオネラ症（肺炎型）	1	1								31
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2	1		1						57
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2							1	1	48
	後天性免疫不全症候群	1								1	32
	侵襲性肺炎球菌感染症	2								2	99
	梅毒	15							2	13	588
	百日咳	1		1							19
結核（2024年3月分）	結核　新登録患者数：58名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　22名）（府内累積報告数　212名、内　肺・喀痰塗抹陽性　91名）										

（2024年5月14日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第20週（5月13日～5月19日）

今週のコメント

～感染症予防の基本～　咳エチケット、手洗い、排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病・A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 いずれも増加」

第20週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,170例であり、前週比29.1%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.76、4.57、2.95、1.47、0.51である。

感染性胃腸炎は前週比22%増の1,124例で、南河内8.50、三島7.94、堺市7.00、北河内6.84、中河内6.47であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は57%増の891例で、大阪市南部7.61、南河内6.69、堺市6.42である。全ブロックで前週より増加していた。10－14歳、6歳、5歳の順で多く報告されている。

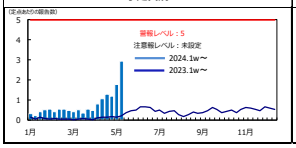
手足口病は66%増の575例で、大阪市北部5.71、北河内4.36、堺市3.84であった。1歳で最も多く報告され、大阪市北部で警報レベル5を超えた。全国の病原微生物検出情報によると、コクサッキーウイルスA6が最も多く検出されている。

RSウイルス感染症は14%減の286例で、中河内2.74、大阪市北部2.57、南河内2.38である。

咽頭結膜熱は5%増の99例で、南河内0.94、堺市0.74、北河内0.68であった。

新型コロナウイルス感染症は12%増の704例で、定点あたり報告数は2.32である。南河内3.33、大阪市東部3.00、堺市2.79、泉州2.71、北河内2.30であった。大型連休の第18週以降、2週続けて増加している。

手足口病



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

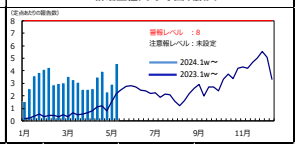


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第20週5月13日～5月19日）

第20週の順位	第19週の順位	感染症	2024年第20週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第20週の定点あたり報告数	2024年第20週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.76	22%増	7.15	１歳_12%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4.57	57%増	2.17	10-14歳_13%
3	3	手足口病	2.95	66%増	0.20	１歳_49%
4	4	RSウイルス感染症	1.47	14%減	3.73	１歳未満_33%
5	6	咽頭結膜熱	0.51	5%増	0.57	１歳_42%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.32	12%増	2.37	50-59歳_14%

新型コロナウイルス感染症は、定点種別が異なるため、参考として記載しています。

詳細はリンク先の「令和2年11月2日以降(大阪府)」の情報をご覧ください。

詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

突発性発しんについては、(1)季節変動はないこと、(2)毎週の定点あたり報告数は一定していること、(3)年次による差異もほとんどないことから、

本文には詳細に記載していません。

第20週のコメント

～侵襲性肺炎球菌感染症～　大阪府では、コロナ禍前の2019年までは毎年250例以上の報告がありました

全数把握感染症

侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、感染症法上、肺炎球菌（*Streptococcus pneumoniae*）による感染症のうち、この菌が髄液又は血液等の無菌部位から検出された感染症のことをいう。髄膜炎、菌血症を伴う肺炎、敗血症などが特に問題とされており、小児および高齢者を中心に患者報告がある。抗菌薬が有効であるが、近年薬剤耐性菌も多く報告されている。侵襲性肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効である。小児および高齢者への定期接種が実施されており、また、64歳以下で肺炎球菌による重症化の危険性が高い人への接種が重要である。

侵襲性肺炎球菌感染症（大阪府感染症情報センター）

肺炎球菌感染症（高齢者）（厚生労働省）

肺炎球菌感染症（高齢者）（国立感染症研究所）

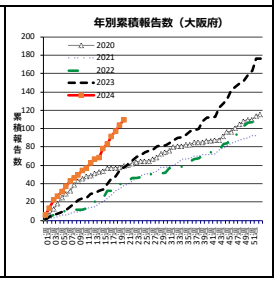


表２．大阪府全数報告数（2024年 第20週5月13日～5月19日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1	33
４類感染症	日本紅斑熱	1							1		3
	レジオネラ症（肺炎型）	2						1		1	34
５類感染症	アメーバ赤痢	1	1								13
	ウイルス性肝炎	1								1	12
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3		1				1		1	62
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1	50
	後天性免疫不全症候群	2	1							1	35
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2	1							1	26
	侵襲性肺炎球菌感染症	6	4							2	110
	梅毒	15		2	1				4	8	638
結核（2024年3月分）	結核　新登録患者数：58名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　22名）（府内累積報告数　212名、内　肺・喀痰塗抹陽性　91名）										

（2024年5月21日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2024年 第21週（5月20日～5月26日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病　増加続く」

第21週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,517例であり、前週比10.9%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.05、4.35、4.25、1.28、0.79である。

感染性胃腸炎は前週比5%増の1,179例で、三島8.94、南河内8.00、豊能6.82、中河内6.63、北河内6.48であった。

手足口病は48%増の849例で、北河内7.16、大阪市北部6.21、泉州4.48である。2ブロックで警報レベル5を超えた。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は7%減の829例で、大阪市南部6.33、堺市6.05、北河内5.88であった。

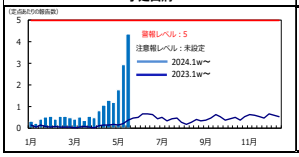
RSウイルス感染症は13%減の250例で、大阪市北部3.21、中河内1.84、南河内1.50である。

咽頭結膜熱は56%増の154例で、中河内1.74、大阪市東部1.33、南河内1.31であった。

新型コロナウイルス感染症は2%減の692例で定点あたり報告数は2.28である。堺市2.90、泉州2.71、大阪市北部2.65、南河内2.58、豊能2.44であった。

基幹定点疾患であるマイコプラズマ肺炎は3週連続で報告数10を超えており、定点あたり報告数は0.83である。前回の流行末期の2017年1月以来の状況であった。今後の発生動向に注意が必要である。

手足口病



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

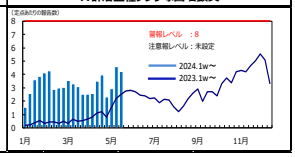


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第21週5月20日～5月26日）

第21週の順位	第20週の順位	感染症	2024年第21週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第21週の定点あたり報告数	2024年第21週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	6.05	5%増	6.12	10-14歳_12%
2	3	手足口病	4.35	48%増	0.37	１歳_42%
3	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4.25	7%減	2.47	４歳_13%
4	4	RSウイルス感染症	1.28	13%減	3.86	１歳未満_37%
5	5	咽頭結膜熱	0.79	56%増	0.91	１歳_40%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.28	2%減	2.75	80歳以上_13%

第21週のコメント

～麻しん～　ワクチンで予防可能な感染症です。2023年、大阪府内の累積感染者数は5例でした。

全数把握感染症

麻しん

麻しん（はしか）は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発しん性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発しんが出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力（一人の患者が12～18人に感染伝播）のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、欧州やアフリカで麻しんが流行している。症状（発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等）があり、１）１か月以内に麻しん患者と接触していた場合、２）麻しん流行国（主にアジア、欧州及びアフリカ諸国）に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン（1歳以上で2回）で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

麻しん情報（大阪府感染症情報センター）
麻疹とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数

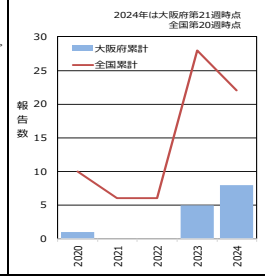


表２．大阪府全数報告数（2024年 第21週5月20日～5月26日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1		34
４類感染症	Ａ型肝炎	1								1		4
	重症熱性血小板減少症候群	1				1						1
	日本紅斑熱	1							1			4
	レジオネラ症（肺炎型）	1					1					35
５類感染症	アメーバ赤痢	1								1		14
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2			1					1		64
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	1									51
	後天性免疫不全症候群	1								1		36
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1								1		4
	水痘（入院例）	1						1				8
	梅毒	15	2		1	2		2			8	672
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1			1							7
	百日咳	1			1							20
	麻しん	1							1			8
結核（2024年3月分）	結核　新登録患者数：58名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　22名）（府内累積報告数　212名、内　肺・喀痰塗抹陽性　91名）											

（2024年5月28日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2024年 第22週（5月27日～6月2日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 警報レベル超える」

第22週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,786例であり、前週比7.6%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.11、5.72、4.10、0.86、0.86である。

手足口病は前週比40%増の1,192例で、大阪市北部9.79、北河内8.68、南河内6.69、中河内6.21、堺市6.00であった。警報レベル開始基準値である５を超えた。

感染性胃腸炎は5%減の1,116例で、南河内9.25、三島6.88、大阪市南部6.50である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%減の799例で、北河内6.92、大阪市南部5.89、南河内5.25であった。

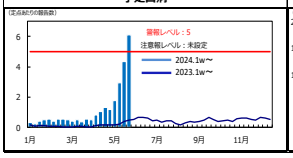
RSウイルス感染症は33%減の168例で、大阪市北部1.86、中河内1.16、泉州1.14である。

咽頭結膜熱は8%増の167例で、中河内1.42、南河内1.38、泉州・大阪市西部・大阪市南部1.00であった。

新型コロナウイルス感染症は4%減の664例で定点あたり報告数は2.19である。大阪市東部2.86、堺市2.72、泉州2.65、南河内2.46、豊能2.19であった。

基幹定点疾患であるマイコプラズマ肺炎は４週連続で報告数10を超えており、定点あたり報告数は0.94である。堺市ブロックでは11例の報告があった。今後の発生動向に注意が必要である。

手足口病



感染性胃腸炎

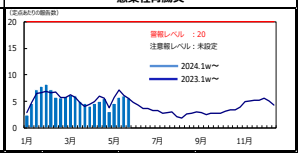


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第22週5月27日～6月2日）

第22週の順位	第21週の順位	感染症	2024年第22週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第22週の定点あたり報告数	2024年第22週の年齢別患者発生数最大割合値
1	2	手足口病	6.11	40%増	0.48	１歳_38%
2	1	感染性胃腸炎	5.72	5%減	5.57	10-14歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4.10	4%減	2.74	10-14歳_16%
4	4	RSウイルス感染症	0.86	33%減	3.34	１歳未満_36%
5	5	咽頭結膜熱	0.86	8%増	0.75	１歳_40%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.19	4%減	3.33	20-29歳_13%

第22週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋において、腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加する。

腸管出血性大腸菌感染症（大阪府感染症情報センター）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数（大阪府）

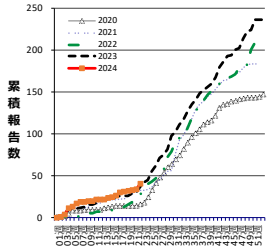


表２．大阪府全数報告数（2024年 第22週5月27日～6月2日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6		3	1					2		40
４類感染症	チクングニア熱	1								1		1
	日本紅斑熱	1								1		5
	レジオネラ症（肺炎型）	2								2		37
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2		1	1							68
	後天性免疫不全症候群	1							1			39
	侵襲性肺炎球菌感染症	6	1		2				2	1		120
	水痘（入院例）	2								2		10
	梅毒	17		1		1		2	1	12		722
	百日咳	1			1							21
結核（2024年4月分）	結核　新登録患者数：93名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　28名）（府内累積報告数　321名、内　肺・喀痰塗抹陽性　123名）											

（2024年6月4日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2024年 第23週（6月3日～6月9日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 さらに増加」

第23週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は4,053例であり、前週比7.1%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.33、5.57、4.45、1.05、0.84である。

手足口病は前週比20%増の1,436例で、南河内10.88、中河内10.68、北河内9.88、大阪市北部9.21、堺市7.74であった。9ブロックで警報レベル開始基準値である５を超えている。国内ではコクサッキーウイルスA6が優位に検出されている。

感染性胃腸炎は2%減の1,091例で、南河内8.69、豊能7.45、大阪市南部7.17であった。

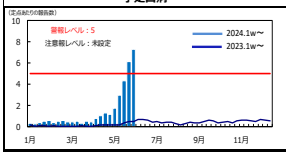
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%増の873例で、北河内6.72、堺市6.16、南河内6.13である。

ヘルパンギーナは25%増の206例で、中河内2.37、大阪市北部2.36、北河内1.68であった。

咽頭結膜熱は2%減の164例で、中河内1.68、南河内1.13、三島1.06である。

新型コロナウイルス感染症は9%増の724例で定点あたり報告数は2.38であった。堺市3.17、南河内3.13、泉州2.74、大阪市北部2.60、北河内2.40である。

手足口病



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

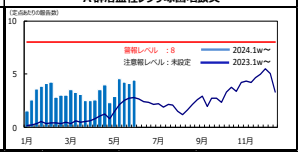


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第23週6月3日～6月9日）

第23週の順位	第22週の順位	感染症	2024年第23週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第23週の定点あたり報告数	2024年第23週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	7.33	20%増	0.47	１歳_32%
2	2	感染性胃腸炎	5.57	2%減	4.74	１歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4.45	9%増	2.72	５歳, ６歳_12%
4	6	ヘルパンギーナ	1.05	25%増	4.66	１歳_26%
5	5	咽頭結膜熱	0.84	2%減	0.89	１歳_40%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.38	9%増	4.33	10-19歳_15%

第23週のコメント

～レジオネラ症～　2023年において、大阪府では132例、全国では2271例の報告がありました。

全数把握感染症

レジオネラ症

レジオネラ症は、レジオネラ・ニューモフィラ　（*Legionella pneumophila*）を代表とするレジオネラ属菌による細菌感染症である。土壌や水環境に、普遍的に存在する菌である。人工環境（噴水等の水景施設、ビル屋上に立つ冷却塔、ジャグジー、加湿器等）や循環水を利用した風呂から発生したレジオネラ属菌を含むエアロゾルを吸入することで感染する。病型として肺炎型と一過性で自然に改善するポンティアック熱型がある。ヒト－ヒト感染はない。細胞性免疫機能が低下したヒトでは肺炎を起こす危険性が通常より高いので、特に留意する必要がある。高齢者、新生児、大酒家、重喫煙者、透析患者、悪性疾患・糖尿病・AIDS患者はハイリスク・グループである。

レジオネラ症（大阪府感染症情報センター）
レジオネラ症とは(国立感染症研究所)

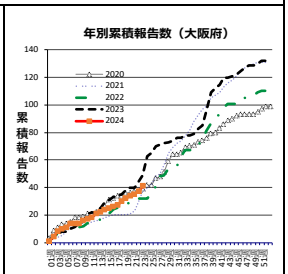


表２．大阪府全数報告数（2024年 第23週6月3日～6月9日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5			2					3		46
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	4					1			3		41
５類感染症	クロイツフェルト・ヤコブ病	1								1		6
	後天性免疫不全症候群	1								1		41
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1		30
	侵襲性肺炎球菌感染症	4								4		126
	梅毒	28	1		3	1			2	21		763
	百日咳	1			1							22
結核（2024年4月分）	結核　新登録患者数：93名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　28名）（府内累積報告数　321名、内　肺・喀痰塗抹陽性　123名）											

（2024年6月11日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報 （速報）
2024年 第24週（6月10日～6月16日）

今週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「新型コロナウイルス感染症 増加」

第24週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,977例であり、前週比1.9%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.54、5.05、4.04、1.15、0.90である。

手足口病は前週比3%増の1,478例で、中河内11.89、北河内10.88、大阪市北部9.29、南河内8.88、大阪市南部8.67であった。

感染性胃腸炎は9%減の989例で、南河内7.63、豊能6.18、三島6.06である。

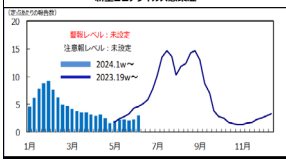
Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%減の792例で、南河内6.81、大阪市南部5.83、堺市5.53であった。

ヘルパンギーナは10%増の226例で、大阪市北部3.21、北河内1.96、中河内1.58である。

咽頭結膜熱は8%増の177例で、中河内1.68、南河内1.44、大阪市南部1.22であった。

新型コロナウイルス感染症は30%増の943例で定点あたり報告数は3.10である。北河内3.73、堺市3.66、豊能3.36、大阪市南部3.11、三島3.07であった。

新型コロナウイルス感染症



手足口病

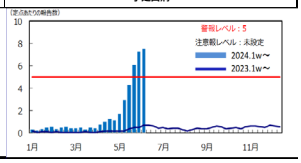


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第24週6月10日～6月16日）

第24週の順位	第23週の順位	感染症	2024年第24週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第24週の定点あたり報告数	2024年第24週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	7.54	3%増	0.66	１歳_35%
2	2	感染性胃腸炎	5.05	9%減	4.39	10-14歳_12%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4.04	9%減	2.69	10-14歳_14%
4	4	ヘルパンギーナ	1.15	10%増	6.55	１歳_25%
5	5	咽頭結膜熱	0.90	8%増	0.88	１歳_36%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	3.10	30%増	4.55	10-19歳_18%

第24週のコメント

～重症熱性血小板減少症候群～　2023年は全国で133例の報告がありました。

全数把握感染症

重症熱性血小板減少症候群

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は、ウイルスを保有するマダニに刺咬されることで感染する。潜伏期は6～14日で、発熱、消化器症状（嘔気、嘔吐、腹痛、下痢、下血）を主徴とし、腹痛、筋肉痛、神経症状、リンパ節腫脹、出血症状などを伴うこともある。致死率は6～30%と報告されている。感染経路はマダニを介したものが中心だが、感染した犬や猫の体液への直接接触による感染や、血液等の患者体液との接触により人から人への感染も報告されている。有効なワクチンはない。

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）（国立感染症研究所）
重症熱性血小板減少症候群（SFTS）について(厚生労働省)

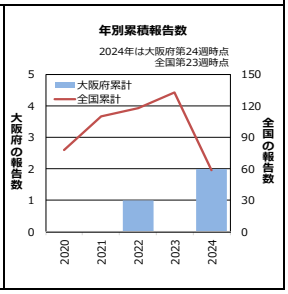


表２．大阪府全数報告数（2024年 第24週6月10日～6月16日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6	1				1			4		54
４類感染症	重症熱性血小板減少症候群	1	1									2
	日本紅斑熱	1	1									6
	レジオネラ症（肺炎型）	5					1	1	1	2		48
	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1								1		
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	5			1		1	1	2			77
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1		1								56
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1		31
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1							1			5
	侵襲性肺炎球菌感染症	4		2				1	1			132
	梅毒	16	2	3			1	1		9		797
	播種性クリプトコックス症	1			1							4
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1							1			8
	百日咳	2								2		26
結核（2024年4月分）	結核　新登録患者数：93名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　28名）（府内累積報告数　321名、内　肺・喀痰塗抹陽性　123名）											

（2024年6月18日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第25週（6月17日～6月23日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 増加続く」

第25週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,939例であり、前週比1.0%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、上位５疾患の定点あたり報告数はそれぞれ8.81、4.40、3.68、1.30、0.76である。

手足口病は前週比17%増の1,727例で、大阪市北部14.07、中河内13.42、南河内11.06、大阪市南部10.67、北河内10.16であった。

感染性胃腸炎は13%減の862例で、南河内5.94、北河内5.20、泉州5.00である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%減の722例で、北河内5.36、大阪市南部4.89、南河内4.56であった。

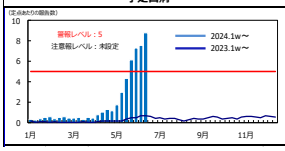
ヘルパンギーナは12%増の254例で、大阪市北部4.00、中河内2.32、南河内1.38である。

咽頭結膜熱は16%減の148例で、中河内1.42、大阪市南部1.17、南河内・泉州1.00であった。

新型コロナウイルス感染症は6%増の1,001例で、定点あたり報告数は3.29である。北河内3.98、堺市3.72、大阪市北部3.65、泉州3.50、大阪市東部3.32であった。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、2週連続で増加し、前週から19例増加の35例で、定点あたり報告数は1.94である。10～14歳では17例の報告があった。

手足口病



A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

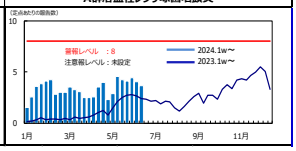


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第25週6月17日～6月23日）

第25週の順位	第24週の順位	感染症	2024年第25週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第25週の定点あたり報告数	2024年第25週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	8.81	17%増	0.65	1歳_34%
2	2	感染性胃腸炎	4.40	13%減	3.71	1歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.68	9%減	2.44	5歳_13%
4	4	ヘルパンギーナ	1.30	12%増	7.65	1歳_30%
5	5	咽頭結膜熱	0.76	16%減	0.89	1歳_43%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	3.29	6%増	5.16	10-19歳_18%

第25週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期についで多く、全国では2021年7,978例、2022年13,221例、2023年は14,906例と増加している

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の年間報告数は、2020年5,867例、2021年7,978例、2022年13,221例、2023年は過去最高の14,906例と増加している。大阪府においても、2023年は2,019例で現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒とは（国立感染症研究所）
梅毒（大阪府感染症情報センター）

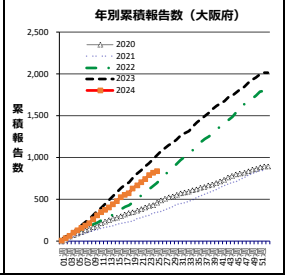


表２．大阪府全数報告数（2024年 第25週6月17日～6月23日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2							1	1	57
４類感染症	日本紅斑熱	1			1						7
	レジオネラ症（肺炎型）	1						1			49
５類感染症	アメーバ赤痢	1				1					16
	ウイルス性肝炎	2			1					1	18
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2		1			1				58
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1					1				32
	侵襲性肺炎球菌感染症	3			2			1			136
	梅毒	14			1	1			3	9	841
	百日咳	2			1				1		28
結核（2024年4月分）	結核　新登録患者数：93名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　28名）（府内累積報告数　321名、内　肺・喀痰塗抹陽性　123名）										

（2024年6月25日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第26週（6月24日～6月30日）

今週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「新型コロナウイルス感染症 増加」

第26週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は4,031例であり、前週比2.3%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ8.95、4.39、3.49、1.43、0.70である。

手足口病の報告数は、前週比2%増の1,763例で、中河内14.58、大阪市北部13.43、南河内11.25、大阪市南部11.06、北河内9.00であった。

感染性胃腸炎は2例増加の864例で、南河内5.94、豊能5.65、中河内5.26である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%減の688例で、堺市4.89、北河内4.72、大阪市南部4.67であった。

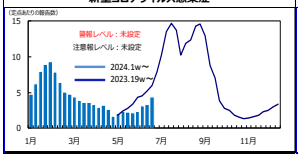
ヘルパンギーナは11%増の281例で、大阪市北部5.71、中河内2.32、豊能1.22である。

咽頭結膜熱は7%減の137例で、中河内1.21、北河内1.04、南河内0.81であった。

新型コロナウイルス感染症は32%増の1,320例で、定点あたり報告数は4.33である。堺市6.14、南河内4.92、泉州4.74、北河内4.53、豊能4.35であった。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、前週から13例減少の22例の報告があり、定点あたり報告数は1.22である。継続して高い値を示している。

新型コロナウイルス感染症



手足口病

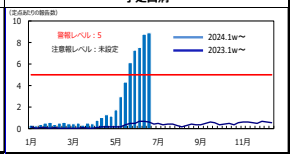


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第26週6月24日～6月30日）

第26週の順位	第25週の順位	感染症	2024年第26週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第26週の定点あたり報告数	2024年第26週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	8.95	2%増	0.62	1歳_31%
2	2	感染性胃腸炎	4.39	増減なし	3.70	1歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.49	5%減	2.38	5歳_14%
4	4	ヘルパンギーナ	1.43	11%増	7.12	1歳_22%
5	5	咽頭結膜熱	0.70	7%減	0.84	1歳_41%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	4.33	32%増	5.93	10-19歳_16%

第26週のコメント

～劇症型溶血性レンサ球菌感染症～　国内では、毎年400-500例報告されているが、2024年は第25週時点で、1000例を超えている

全数把握感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、主にA群溶血性レンサ球菌(*Streptococcus pyogenes*)による感染症である。国内では、毎年400-500例報告されており、約30%が死亡している。極めて致死率の高い感染症である。病状の進行が非常に急激かつ劇的で、発病後数十時間以内には軟部組織壊死、急性腎不全、急性呼吸窮迫症候群（ARDS）、播種性血管内凝固症候群（DIC）、多臓器不全を引き起こし、ショック状態から死に至ることがある。治療は、ペニシリン等の抗菌薬の投与と壊死に陥った軟部組織の切除が必要である。大阪府における2023年の報告数は過去10年で2番目に高かったが、2024年はすでに昨年の年間報告数を超えている。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症の発生状況および特徴のまとめ（大阪府感染症情報センター）
劇症型溶血性レンサ球菌感染症とは（国立感染症研究所）

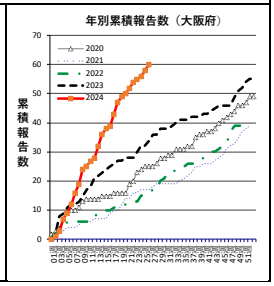


表２．大阪府全数報告数（2024年 第26週6月24日～6月30日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3					1		2		63
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	3		1		1				1	53
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1								1	78
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2	1							1	60
	後天性免疫不全症候群	1		1							44
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1	33
	侵襲性肺炎球菌感染症	2		1						1	139
	梅毒	23	1	4	2	2	1	1	2	10	888
	百日咳	1					1				29
結核（2024年4月分）	結核　新登録患者数：93名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　28名）（府内累積報告数　321名、内　肺・喀痰塗抹陽性　123名）										

（2024年7月2日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第27週（7月1日～7月7日）

今週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「新型コロナウイルス感染症 全ブロックで増加」

第27週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,957例であり、前週比1.8%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ9.44、3.94、3.02、1.42、0.73の順である。

手足口病の報告数は、前週比6%増の1,860例で、中河内13.84、大阪市北部12.50、南河内12.25、大阪市南部10.94、北河内9.36であった。全ブロックで警報レベル開始基準値である５を超えた。

感染性胃腸炎は10%減の777例で、南河内5.94、北河内5.24、豊能4.87である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%減の595例で、大阪市南部4.94、北河内3.88、堺市3.84であった。

ヘルパンギーナは1例減の280例で、大阪市北部4.50、南河内2.06、中河内1.95である。

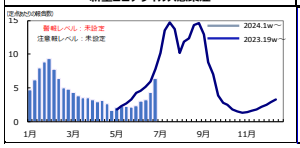
RSウイルス感染症は9%増の143例で、大阪市北部2.00、北河内1.16、南河内1.06であった。

インフルエンザは94%増の128例で、定点あたり報告数は0.42である。大阪市北部0.85、南河内0.79、大阪市西部0.73、豊能0.51、北河内0.40であった。

新型コロナウイルス感染症は48%増の1,951例で、定点あたり報告数は6.40である。堺市9.07、南河内7.63、大阪市西部6.93、大阪市東部6.91、北河内6.88であった。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、前週から18例増の40例の報告があり、定点あたり報告数は2.22である。2024年では最多の報告数であった。

新型コロナウイルス感染症



手足口病

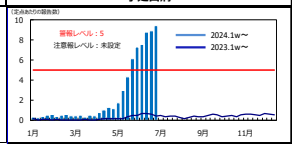


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第27週7月1日～7月7日）

第27週の順位	第26週の順位	感染症	2024年第27週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第27週の定点あたり報告数	2024年第27週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	9.44	6%増	0.44	１歳_30%
2	2	感染性胃腸炎	3.94	10%減	3.27	10-14歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.02	14%減	2.19	10-14歳_14%
4	4	ヘルパンギーナ	1.42	0%減	6.01	１歳_21%
5	6	RSウイルス感染症	0.73	9%増	1.84	１歳_36%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	6.40	48%増	7.87	10-19歳_16%

第27週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～　2024年は累計6例で昨年の年間報告数3例を超えている

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌（*Neisseria meningitidis*）による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜刺激症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群（DIC）を呈する。髄膜炎ベルト（meningitis belt）とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、ペニシリン系抗菌薬と第三世代セフェム系抗菌薬が有効である。患者との接触者には、緊急に、リファンピシン、シプロフロキサシンやセフトリアキソンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌（血清型A、C、Y、W-135）ワクチンの任意接種が開始されている。

髄膜炎菌性髄膜炎とは（国立感染症研究所）
侵襲性髄膜炎菌感染症について（厚生労働省）

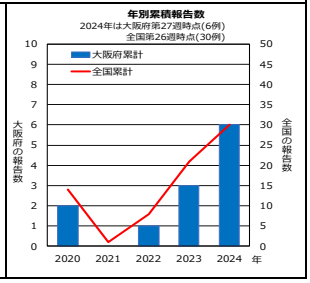


表２．大阪府全数報告数（2024年 第27週7月1日～7月7日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞ 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3								3	67
４類感染症	オウム病	1							1		1
	デング熱	2							1	1	6
	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1								1	57
	レジオネラ症（肺炎型）	3			1		1			1	
５類感染症	アメーバ赤痢	1			1						19
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2								2	80
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1						1			7
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2				1				1	62
	後天性免疫不全症候群	1								1	49
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1	36
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1						1			6
	侵襲性肺炎球菌感染症	3			1	1				1	148
	梅毒	27		2	2	2			3	18	942
	百日咳	4		1		1				2	33
結核（2024年5月分）	結核　新登録患者数：87名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　413名、内　肺・喀痰塗抹陽性　157名）										

（2024年7月9日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第28週（7月8日～7月14日）

今週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種

定点把握感染症

「新型コロナウイルス感染症 増加続く」

第28週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,956例であり、前週より1例減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ9.85、3.59、2.79、1.64、1.05である。

手足口病の報告数は前週比4%増の1,941例で、中河内13.21、大阪市西部11.90、大阪市北部11.29、北河内11.24、大阪市南部10.78であった。大阪府内では、コクサッキーウイルスA6型が検出されている。

感染性胃腸炎は9%減の708例で、南河内5.44、北河内5.00、豊能4.74である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は8%減の549例で、大阪市南部4.67、堺市4.05、北河内3.96であった。

ヘルパンギーナは16%増の324例で、大阪市北部3.00、北河内2.64、中河内2.37である。

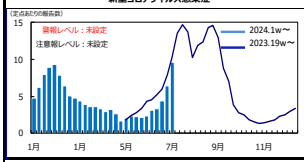
RSウイルス感染症は44%増の206例で、南河内2.25、大阪市北部1.86、北河内1.40であった。

インフルエンザは16%増の149例で、定点あたり報告数は0.49である。大阪市北部1.15、大阪市西部1.00、泉州0.59、南河内0.58、堺市0.55であった。

新型コロナウイルス感染症は51%増の2,943例で、定点あたり報告数は9.65である。堺市12.93、南河内11.83、豊能10.59、大阪市北部10.50、大阪市西部10.07であり、前週に引き続き全ブロックで増加していた。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、前週から5例減の35例の報告があり、定点あたり報告数は1.94である。

新型コロナウイルス感染症



手足口病

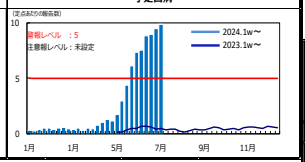


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第28週7月8日～7月14日）

第28週の順位	第27週の順位	感染症	2024年第28週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第28週の定点あたり報告数	2024年第28週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	9.85	4%増	0.47	１歳_25%
2	2	感染性胃腸炎	3.59	9%減	3.20	１歳_19%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.79	8%減	2.18	10-14歳_15%
4	4	ヘルパンギーナ	1.64	16%増	4.77	１歳，２歳_19%
5	5	RSウイルス感染症	1.05	44%増	1.66	１歳未満_32%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	9.65	51%増	10.22	10-19歳_17%

第28週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋において、腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加するが、2023年は秋以降も報告数が多いことから、引き続き注

腸管出血性大腸菌感染症（大阪府感染症情報センター）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

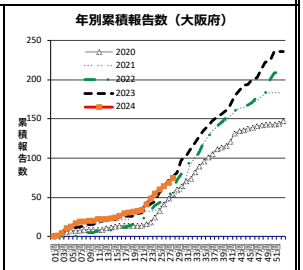


表２．大阪府全数報告数（2024年 第28週7月8日～7月14日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞ 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7		2		3		1		1	75
４類感染症	デング熱	1								1	7
	レジオネラ症（肺炎型）	4	1	1				1		1	62
５類感染症	アメーバ赤痢	1								1	22
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1					1				85
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3				1				2	65
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2							1	1	38
	侵襲性肺炎球菌感染症	1		1							151
	梅毒	9					2			7	976
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1					1				10
	百日咳	1	1								34
結核（2024年5月分）	結核　新登録患者数：87名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　413名、内　肺・喀痰塗抹陽性　157名）										

（2024年7月16日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第29週（7月15日～7月21日）

今週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種

定点把握感染症

「新型コロナウイルス感染症 全ブロックで３週連続増加」

第29週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,290例であり、前週比16.8%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ8.08、3.14、2.21、1.48、0.81である。

手足口病は前週比18%減の1,591例で、中河内12.05、南河内10.25、北河内9.88、大阪市南部9.78、大阪市西部8.90であった。

感染性胃腸炎は13%減の618例で、北河内4.96、中河内4.21、大阪市南部3.72である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は21%減の436例で、南河内4.13、堺市3.42、大阪市南部3.06であった。

ヘルパンギーナは10%減の292例で、大阪市北部2.93、中河内2.68、南河内2.56である。

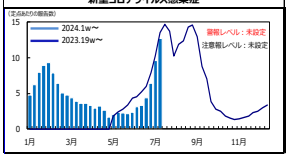
RSウイルス感染症は22%減の160例で、大阪市北部1.71、北河内1.24、南河内1.13であった。

インフルエンザは19%減の121例で、定点あたり報告数は0.40である。大阪市西部0.67、大阪市北部0.55、堺市0.52、北河内0.49、南河内0.46であった。

新型コロナウイルス感染症は32%増の3,892例で、定点あたり報告数は12.72である。大阪市北部15.55、堺市14.76、北河内14.68、大阪市東部13.77、南河内13.04であり、全ブロックで３週連続増加していた。2024年第１週以降の新型コロナウイルス感染症入院サーベイランス累計報告数は70歳以上が70%を占めている。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、前週から6例増の41例の報告があり、定点あたり報告数は2.28である。

新型コロナウイルス感染症



手足口病

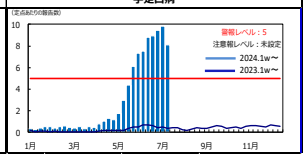


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第29週7月15日～7月21日）

第29週の順位	第28週の順位	感染症	2024年第29週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第29週の定点あたり報告数	2024年第29週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	8.08	18%減	0.31	1歳_25%
2	2	感染性胃腸炎	3.14	13%減	2.68	1歳_18%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.21	21%減	1.93	5歳_14%
4	4	ヘルパンギーナ	1.48	10%減	3.11	2歳_20%
5	5	RSウイルス感染症	0.81	22%減	1.46	1歳_43%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	12.72	32%増	13.56	10-19歳_15%

第29週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要です。

腸管出血性大腸菌感染症（大阪府感染症情報センター）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数（大阪府）

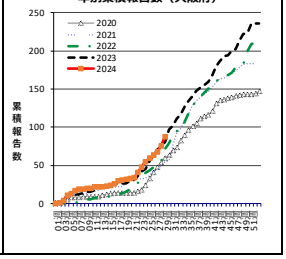


表２．大阪府全数報告数（2024年 第29週7月15日～7月21日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	**腸管出血性大腸菌感染症**	11		2	3	2	1	2	1		87
４類感染症	**Ｅ型肝炎**	1							1		2
	日本紅斑熱	1							1		7
	マラリア（病型不明）	1								1	4
	レジオネラ症（肺炎型）	1		1							64
５類感染症	**アメーバ赤痢**	1	1								23
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3	1	2							90
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2							1	1	68
	後天性免疫不全症候群	1								1	53
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1		1							40
	侵襲性肺炎球菌感染症	2		1					1		156
	梅毒	18		3		3			1	11	1063
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1					1				11
結核（2024年5月分）	**結核　新登録患者数：87名**（内　肺・喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　413名、内　肺・喀痰塗抹陽性　157名）										

（2024年7月23日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第30週（7月22日～7月28日）

今週のコメント

～マイコプラズマ肺炎～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「マイコプラズマ肺炎 今後の動向に注意」

第30週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は3,158例であり、前週比4.0%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ7.45、3.15、2.06、1.29、1.10である。

手足口病の報告数は前週比8%減の1,468例で、泉州10.24、中河内9.79、南河内9.31、大阪市南部8.72、北河内8.32であった。

感染性胃腸炎は３例増の621例で、大阪市南部5.11、南河内4.31、中河内3.95である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は7%減の406例で、大阪市南部4.28、堺市2.74、南河内2.44であった。

ヘルパンギーナは13%減の255例で、南河内2.94、大阪市北部2.64、中河内1.84である。

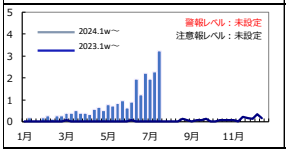
RSウイルス感染症は35%増の216例で、大阪市北部2.71、北河内1.44、大阪市東部1.40であった。

インフルエンザは14%増の138例で、定点あたり報告数は0.45である。南河内1.42、大阪市北部1.00、北河内0.66、大阪市西部0.60、堺市0.48である。

新型コロナウイルス感染症は15%増の4,486例で、定点あたり報告数は14.66である。堺市20.38、北河内17.73、大阪市北部16.55、南河内15.08、泉州14.74であった。2024年第１週以降の新型コロナウイルス感染症入院サーベイランス累計報告数は70歳以上が70%を占めている。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、前週から17例増の58例の報告があり、定点あたり報告数は3.22である。過去10年と比べて、多い報告数で推移している。

マイコプラズマ肺炎



新型コロナウイルス感染症

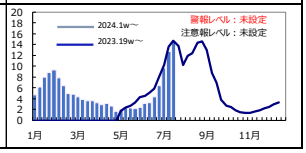


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第30週7月22日～7月28日）

第30週の順位	第29週の順位	感染症	2024年第30週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第30週の定点あたり報告数	2024年第30週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	7.45	8%減	0.44	1歳_24%
2	2	感染性胃腸炎	3.15	増減なし	2.96	1歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.06	7%減	2.16	4歳_13%
4	4	ヘルパンギーナ	1.29	13%減	2.28	1歳_19%
5	5	RSウイルス感染症	1.10	35%増	1.19	1歳_33%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	14.66	15%増	14.66	10-19歳_14%

第30週のコメント

～ デング熱 ～ 海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

デング熱

デング熱は、ネッタイシマカやヒトスジシマカなどの蚊によって媒介されるデングウイルスの感染症である。比較的軽症型のデング熱と、重症型のデング出血熱がある。熱帯・亜熱帯地域、特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1 億人がデング熱を発症する。海外渡航で感染し国内で発症する例（輸入症例）が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例により持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発症し、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることがある。

デング熱について（厚生労働省）
デング熱とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数（大阪府）

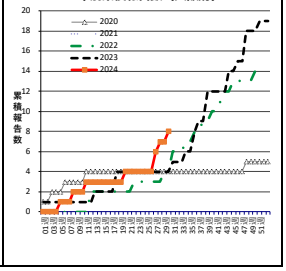


表２．大阪府全数報告数（2024年 第30週7月22日～7月28日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	**細菌性赤痢**	1								1	1
	腸管出血性大腸菌感染症	8		1		3	1	1		2	95
４類感染症	**デング熱**	1							1		8
	マラリア（三日熱）	1							1		5
	レジオネラ症（肺炎型）	4		2	1					1	68
５類感染症	**アメーバ赤痢**	1			1						24
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	5	1				1	2		1	94
	急性脳炎	1								1	9
	ジアルジア症	1								1	2
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2			1	1					42
	侵襲性肺炎球菌感染症	4	1	1			1			1	160
	梅毒	12		1			1		1	9	1,095
	百日咳	2			1			1			37
結核（2024年5月分）	**結核　新登録患者数：87名**（内　肺・喀痰塗抹陽性　33名）（府内累積報告数　413名、内　肺・喀痰塗抹陽性　157名）										

（2024年7月23日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第31週（7月29日～8月4日）

今週のコメント

～マイコプラズマ肺炎～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「マイコプラズマ肺炎　2016年以来の報告数の増加」

第31週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,770例であり、前週比12.3%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.08、2.98、1.80、1.19、1.01である。

手足口病の報告数は前週比18%減の1,197例で、3週連続して減少した。泉州9.71、大阪市南部9.06、中河内8.16、南河内7.44、北河内6.88であった。

感染性胃腸炎は5%減の588例で、中河内4.32、豊能3.96、大阪市南部3.94である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は13%減の355例で、堺市3.21、大阪市南部2.67、北河内2.24であった。

ヘルパンギーナは8%減の234例で、中河内2.37、南河内2.31、大阪市北部2.21である。

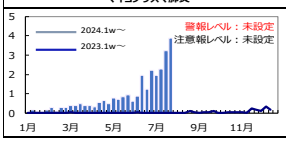
RSウイルス感染症は8%減の199例で、大阪市北部2.00、堺市1.26、泉州1.24であった。

インフルエンザは1%増の139例で、定点あたり報告数は0.45である。泉州1.59、大阪市北部0.95、南河内0.63、堺市0.59、大阪市東部0.36であった。

新型コロナウイルス感染症は13%減の3,924例で、定点あたり報告数は12.82である。堺市18.24、北河内15.66、大阪市南部14.33、大阪市北部14.05、南河内13.63であった。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は70例で、2016年第42週以来の多い報告数となっている。

マイコプラズマ肺炎



新型コロナウイルス感染症

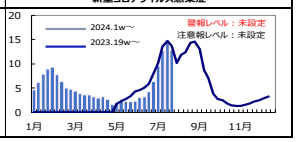


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第31週7月29日～8月4日）

第31週の順位	第30週の順位	感染症	2024年第31週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第31週の定点あたり報告数	2024年第31週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	6.08	18%減	0.46	１歳_24%
2	2	感染性胃腸炎	2.98	5%減	3.00	１歳_15%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.80	13%減	2.09	10-14歳_14%
4	4	ヘルパンギーナ	1.19	8%減	1.61	１歳_21%
5	5	RSウイルス感染症	1.01	8%減	1.17	１歳_39%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	12.82	13%減	13.69	50-59歳_12%

第31週のコメント

～百日咳～　生後2か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌（*Bordetella pertussis*）による 急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり（カタル期）、百日咳特有の咳が出始める （痙咳期）。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

百日咳（大阪府感染症情報センター）
百日咳とは（国立感染症研究所）

年別累積報告数（大阪府）

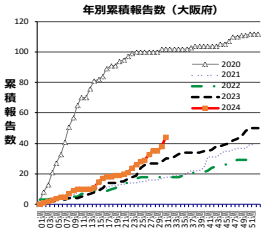


表２．大阪府全数報告数（2024年 第31週7月29日～8月4日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数 府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4						1	1	2	96
	腸チフス	1							1		3
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1					1				69
５類感染症	アメーバ赤痢	1								1	26
	ウイルス性肝炎	1					1				20
	急性脳炎	1							1		10
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3		1			1			1	73
	後天性免疫不全症候群	2								2	57
	侵襲性肺炎球菌感染症	2				1				1	163
	水痘（入院例）	1		1							14
	梅毒	12	1	3				1		7	1,126
	百日咳	6	3					1		2	44
	風しん	1								1	1
結核（2024年6月分）	結核　新登録患者数：75名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　25名）（府内累積報告数　490名、内　肺・喀痰塗抹陽性　186名）										

（2024年8月6日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第32週（8月5日～8月11日）

今週のコメント

～マイコプラズマ肺炎～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「マイコプラズマ肺炎、過去10年と比べて多い報告数」

第32週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,117例であり、前週比23.6%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.34、2.51、1.55、0.77、0.71である。

手足口病の報告数は前週比29%減の855例で、中河内6.37、堺市5.53、泉州5.19、大阪市北部5.14、北河内4.72であった。

感染性胃腸炎は16%減の494例で、三島3.47、大阪市南部3.11、南河内2.81である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は14%減の306例で、大阪市南部2.44、堺市2.26、南河内2.25であった。

ヘルパンギーナは35%減の151例で、大阪市北部1.64、大阪市西部1.40、中河内1.11である。

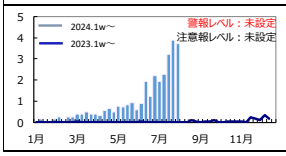
RSウイルス感染症は30%減の140例で、大阪市北部1.86、大阪市西部1.40、中河内1.11であった。

インフルエンザは42%減の81例で、定点あたり報告数は0.26である。大阪市北部1.05、南河内0.75、堺市0.28、大阪市東部0.23、泉州0.21であった。

新型コロナウイルス感染症は41%減の2,329例で、定点あたり報告数は7.61である。堺市13.72、南河内8.46、豊能8.14、大阪市北部7.80、北河内7.73であった。2024年第１週以降の新型コロナウイルス感染症入院サーベイランス累計報告数は70歳以上が70%を占めている。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は、67例の報告があった。前週より３例減となったが、過去10年と比べて引き続き多い報告数となっている。

マイコプラズマ肺炎



新型コロナウイルス感染症

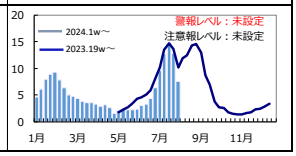


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第32週8月5日～8月11日）

第32週の順位	第31週の順位	感染症	2024年第32週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第32週の定点あたり報告数	2024年第32週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	4.34	29%減	0.26	１歳_24%
2	2	感染性胃腸炎	2.51	16%減	1.90	１歳_19%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.55	14%減	1.33	３歳_14%
4	4	ヘルパンギーナ	0.77	35%減	0.64	２歳_22%
5	5	RSウイルス感染症	0.71	30%減	0.72	１歳_39%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	7.61	41%減	10.23	80歳以上_13%

第32週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～　2024年第32週の累積報告数は、過去10年で最も多い2019年と同数になった。

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌（*Neisseria meningitidis*）による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜刺激症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、重症化をきたすと紫斑の出現、ショック、播種性血管内凝固症候群（DIC）を呈する。髄膜炎ベルト（meningitis belt）とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、第三世代セフェム系抗菌薬等が使用される。患者との接触者には、緊急に、リファンピシンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌（血清型A、C、Y、W-135）ワクチンの任意接種が開始されている。

髄膜炎菌性髄膜炎とは（国立感染症研究所）
侵襲性髄膜炎菌感染症（厚生労働省）

年別累積報告数

2024年は大阪府第32週時点　（7例）
全国第31週時点（36

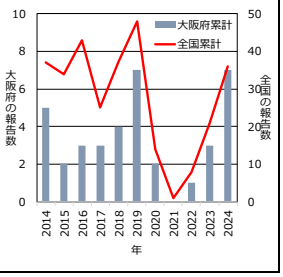


表２．大阪府全数報告数（2024年 第32週8月5日～8月11日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数 府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4	1	1				1		1	105
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2			2						73
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3		1	1			1			104
	急性脳炎	1							1		11
	後天性免疫不全症候群	1								1	60
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1								1	7
	梅毒	7		1	1					5	1,143
	百日咳	1								1	45
結核（2024年6月分）	結核　新登録患者数：75名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　25名）（府内累積報告数　490名、内　肺・喀痰塗抹陽性　186名）										

（2024年8月13日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第33週（8月12日～8月18日）

今週のコメント

～マイコプラズマ肺炎～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「マイコプラズマ肺炎　引き続き多い」

第33週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は992例であり、前週比53.1%減であった。今週の報告数は、お盆期間による診療実日数の減少を考慮する必要がある。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ1.78、1.23、0.81、0.42、0.38である。

手足口病の報告数は前週比59%減の350例で、大阪市北部3.50、北河内3.04、大阪市西部2.70、南河内2.63、中河内1.42であった。

感染性胃腸炎は51%減の242例で、大阪市西部2.20、豊能1.96、南河内1.50である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は48%減の160例で、南河内1.38、大阪市南部1.33、豊能1.04であった。

RSウイルス感染症は41%減の82例で、大阪市北部1.07、北河内0.84、南河内0.63である。

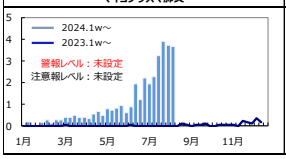
ヘルパンギーナは50%減の75例で、大阪市北部1.57、大阪市西部0.70、南河内0.56であった。

インフルエンザは57%減の35例で、定点あたり報告数は0.11である。南河内0.38、大阪市東部0.18、北河内0.17、大阪市北部0.15、大阪市西部0.13であった。

新型コロナウイルス感染症は40%減の1,403例で、定点あたり報告数は4.58である。南河内8.42、大阪市北部6.75、大阪市西部6.07、堺市5.90、豊能5.81であった。70歳以上が占める割合は、前週より増加し33%である。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は、66例の報告があった。前週より1例減となったが、過去10年と比べて引き続き多い報告数となっている。

マイコプラズマ肺炎



新型コロナウイルス感染症

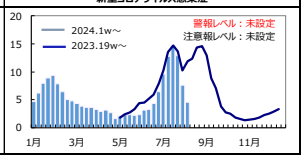


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2024年 第33週8月12日～8月18日）

第33週の順位	第32週の順位	感染症	2024年第33週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第33週の定点あたり報告数	2024年第33週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	1.78	59%減	0.17	１歳_27%
2	2	感染性胃腸炎	1.23	51%減	1.90	１歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.81	48%減	1.21	10-14歳_17%
4	5	RSウイルス感染症	0.42	41%減	0.56	１歳_41%
5	4	ヘルパンギーナ	0.38	50%減	0.55	１歳，３歳_19%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	4.58	40%減	11.88	80歳以上_18%

第33週のコメント

～ デング熱 ～　海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

デング熱

デング熱は、ネッタイシマカやヒトスジシマカなどの蚊によって媒介されるデングウイルスの感染症である。比較的軽症型のデング熱と、重症型のデング出血熱がある。熱帯･亜熱帯地域、特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1億人がデング熱を発症する。海外渡航で感染し国内で発症する例（輸入症例）が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例により持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発症し、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることがある。

デング熱について（厚生労働省）
デング熱とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数（大阪府）

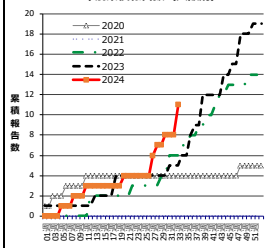


表２．大阪府全数報告数（2024年 第33週8月12日～8月18日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7					2	1		4		118
４類感染症	デング熱	3							3			11
	レジオネラ症（肺炎型）	1								1		74
５類感染症	ウイルス性肝炎	1					1					22
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2							1	1		108
	侵襲性肺炎球菌感染症	2				1				1		170
	梅毒	7			1				1	5		1,202
	百日咳	2								2		49
結核（2024年6月分）	結核　新登録患者数：75名　（内　肺･喀痰塗抹陽性　25名）（府内累積報告数　490名、内　肺･喀痰塗抹陽性　186名）											

（2024年8月20日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第34週（8月19日～8月25日）

今週のコメント

～マイコプラズマ肺炎～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「マイコプラズマ肺炎　報告数多い状態が続く」

第34週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,625例であり、お盆期間の前週に比し、63.8%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ2.67、2.59、1.38、0.50、0.42である。

手足口病の報告数は前週比50%増の526例で、北河内5.48、中河内3.63、大阪市北部2.79、南河内2.63、三島2.41であった。

感染性胃腸炎は111%増の511例で、南河内4.06、北河内3.84、中河内3.32である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は70%増の272例で、大阪市南部2.61、堺市2.58、大阪市東部1.87であった。

RSウイルス感染症は20%増の98例で、北河内0.76、南河内0.75、大阪市北部0.71である。

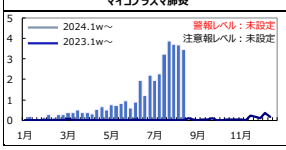
ヘルパンギーナは11%増の83例で、中河内0.84、南河内0.56、堺市0.53であった。

インフルエンザは137%増の83例で、定点あたり報告数は0.27である。大阪市南部0.48、南河内0.42、大阪市北部0.40、堺市0.31、北河内0.27であった。

新型コロナウイルス感染症は15%増の1,620例で、定点あたり報告数は5.29である。堺市6.86、北河内6.63、大阪市北部6.50、南河内5.88、豊能5.32であった。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は、62例の報告がある。前週より4例減となったが、過去10年と比べて引き続き多い報告数となっている。

マイコプラズマ肺炎



新型コロナウイルス感染症

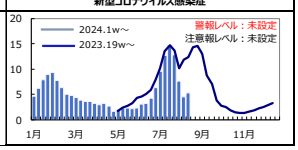


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2024年 第34週8月19日～8月25日）

第34週の順位	第33週の順位	感染症	2024年第34週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第34週の定点あたり報告数	2024年第34週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	2.67	50%増	0.27	１歳_22%
2	2	感染性胃腸炎	2.59	111%増	2.69	１歳_14%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.38	70%増	1.66	10-14歳_14%
4	4	RSウイルス感染症	0.50	20%増	0.46	１歳_40%
5	5	ヘルパンギーナ	0.42	11%増	0.64	１歳_18%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	5.29	15%増	12.40	70-79歳_13%

第34週のコメント

～百日咳～　生後2か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌（*Bordetella pertussis*）による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり（カタル期）、百日咳特有の咳が出始める（痙咳期）。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

百日咳（大阪府感染症情報センター）
百日咳とは（国立感染症研究所）

年別累積報告数（大阪府）

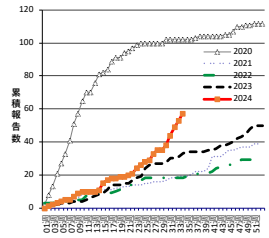


表２．大阪府全数報告数（2024年 第34週8月19日～8月25日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7	1				2		2	2		124
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	2								2		76
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2	1							1		112
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1		77
	後天性免疫不全症候群	2				1			1			64
	侵襲性肺炎球菌感染症	2	1							1		173
	水痘（入院例）	2				1				1		19
	梅毒	16	1	1	1		1			12		1,225
	百日咳	4	1		1					2		57
結核（2024年6月分）	結核　新登録患者数：75名　（内　肺･喀痰塗抹陽性　25名）（府内累積報告数　490名、内　肺･喀痰塗抹陽性　186名）											

（2024年8月27日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第35週（8月26日～9月1日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病　今後の動向に注意」

第35週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,996例であり、前週比22.8%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.84、2.88、1.57、0.68、0.48である。

手足口病の報告数は前週比44%増の757例で、北河内6.44、大阪市北部5.93、中河内5.79、豊能3.48、三島3.41であった。

感染性胃腸炎は11%増の567例で、中河内4.32、北河内4.00、南河内3.69である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は14%増の309例で、大阪市東部2.67、堺市2.47、大阪市南部2.00であった。

RSウイルス感染症は37%増の134例で、中河内1.21、大阪市北部1.07、北河内0.88である。

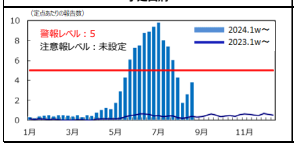
ヘルパンギーナは13%増の94例で、大阪市北部1.00、豊能0.70、南河内0.69であった。

インフルエンザは19%増の99例で、定点あたり報告数は0.32である。大阪市北部0.75、南河内0.67、大阪市南部0.59、泉州0.35、中河内0.30であった。

新型コロナウイルス感染症は16%減の1,368例で、定点あたり報告数は4.47である。堺市6.03、大阪市北部5.65、泉州5.09、北河内4.98、豊能4.76であった。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は、48例の報告がある。前週より14例減となったが、過去10年と比べて引き続き多い報告数となっている。

手足口病



マイコプラズマ肺炎

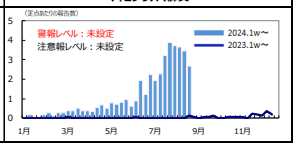


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第35週8月26日～9月1日）

第35週の順位	第34週の順位	感染症	2024年第35週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第35週の定点あたり報告数	2024年第35週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	3.84	44%増	0.41	１歳_29%
2	2	感染性胃腸炎	2.88	11%増	2.77	１歳_19%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.57	14%増	2.16	10-14歳_15%
4	4	RSウイルス感染症	0.68	37%増	0.38	１歳_44%
5	5	ヘルパンギーナ	0.48	13%増	0.50	１歳_32%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	4.47	16%減	14.35	80歳以上_13%

第35週のコメント

～E型肝炎～　大阪府では、2020年以降毎年4～12名の報告があります

全数把握感染症

E型肝炎

日本において、E型肝炎は、野生シカ、イノシシの肉、ブタの生レバーなどの喫食が原因と見られる急性肝炎例が報告されている。まれに急性肝炎が悪化して劇症肝炎となり死に至るケースもある。平均6週間の潜伏期の後に、発熱、悪心・腹痛等の消化器症状、肝腫大、肝機能の悪化（トランスアミナーゼ上昇・黄疸）が現れ、大半の症例では安静により治癒するが、まれに劇症化するケースもある。妊娠後期の妊婦、高齢者が重症化することがある。野生シカ、イノシシなどの野生動物の肉（内臓を含む）、レバーを含むブタ肉は、生食を避けるよう、注意が必要である。

E型肝炎とは(国立感染症研究所)

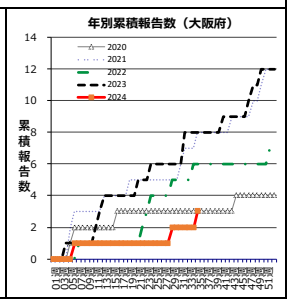


表２．大阪府全数報告数（2024年 第35週8月26日～9月1日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2			1	1						118
４類感染症	E 型肝炎	1				1						3
	日本紅斑熱	1							1			8
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3		1			1		1			116
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	5	1	1		2	1					48
	侵襲性肺炎球菌感染症	1						1				174
	梅毒	7		1		3			2	1		1,232
	播種性クリプトコックス症	1			1							7
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1				1						12
	百日咳	2		1	1							60
結核（2024年7月分）	結核　新登録患者数：84名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　612名、内　肺・喀痰塗抹陽性　225名）											

（2024年9月3日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第36週（9月2日～9月8日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病　警報レベル迫る」

第36週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は　2,306例であり、前週比　15.5%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ　4.69、3.16、1.80、0.88、0.36である。

手足口病は前週比22%増の923例で、北河内7.76、大阪市北部7.57、中河内6.95、三島6.18、堺市3.79であった。前週と比べ、全ブロックで増加している。

感染性胃腸炎は　10%増の622例で、北河内4.40、豊能3.78、大阪市南部3.50である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は　15%増の355例で、大阪市南部2.67、堺市2.53、中河内2.11であった。

RSウイルス感染症は　30%増の174例で、大阪市北部・堺市1.21、南河内1.19である。

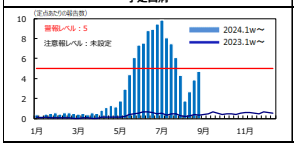
ヘルパンギーナは　24%減の71例で、中河内0.74、三島0.59、大阪市東部0.53であった。

第36週から2024/25シーズンのサーベイランスが開始されたインフルエンザは32%増の131例で、定点あたり報告数は0.43である。南河内1.25の1ブロックで定点あたり報告数1を超えた。

新型コロナウイルス感染症は10%減の1,231例で、定点あたり報告数は4.02である。南河内5.50、北河内5.37、泉州4.74、堺市4.48、三島3.74であった。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は前週から5例減の43例の報告があった。

手足口病



RSウイルス感染症

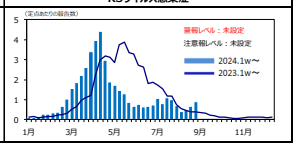


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第36週9月2日～9月8日）

第36週の順位	第35週の順位	感染症	2024年第36週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第36週の定点あたり報告数	2024年第36週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	4.69	22%増	0.33	１歳_26%
2	2	感染性胃腸炎	3.16	10%増	2.96	１歳_20%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.80	15%増	2.54	10-14歳_14%
4	4	RSウイルス感染症	0.88	30%増	0.37	１歳_40%
5	5	ヘルパンギーナ	0.36	24%減	0.48	１歳_24%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.43	32%増	3.90	20歳以上_18%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	4.02	10%減	14.62	10-19歳_16%

第36週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期をおいて、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。初夏～初秋は腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加することから、十分注意が必要である。

腸管出血性大腸菌感染症（大阪府感染症情報センター）
腸管出血性大腸菌感染症とは(国立感染症研究所)

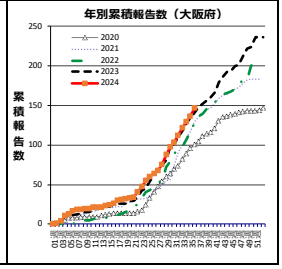


表２．大阪府全数報告数（2024年 第36週9月2日～9月8日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	11	1	3	2	1	1			3		147
４類感染症	デング熱	1							1			13
	日本紅斑熱	1	1									9
	レジオネラ症（肺炎型）	1					1					79
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2				1	1					122
	急性脳炎	2							2			13
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2	1					1				82
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1		49
	侵襲性肺炎球菌感染症	1					1					175
	水痘（入院例）	1			1							21
	梅毒	11		1			1		1	8		1,311
	百日咳	4					1			3		70
結核（2024年7月分）	結核　新登録患者数：84名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　612名、内　肺・喀痰塗抹陽性　225名）											

（2024年9月10日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第37週（9月9日～9月15日）

今週のコメント

～マイコプラズマ肺炎～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「マイコプラズマ肺炎　高い報告数続く」

第37週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,335例であり、前週比1.3%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.93、3.06、1.99、0.84、0.30である。

手足口病の報告数は前週比5%増の971例で、北河内8.60、大阪市北部7.14、中河内7.00、豊能5.48、三島5.12であった。警報レベル開始基準値5に迫る報告数となっている。

感染性胃腸炎は3%減の602例で、南河内4.31、中河内3.95、泉州3.76である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は11%増の393例で、大阪市南部2.89、北河内2.80、堺市2.47であった。4週連続で増加している。

RSウイルス感染症は5%減の165例で、大阪市北部2.00、南河内1.31、中河内1.05である。

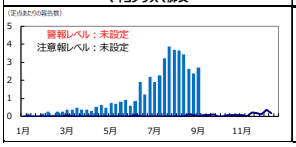
ヘルパンギーナは17%減の59例で、大阪市北部0.71、豊能0.65、北河内0.44であった。

インフルエンザは28%減の94例で、定点あたり報告数は0.31である。泉州0.53、大阪市北部0.50、大阪市西部0.40、豊能・南河内0.38であった。

新型コロナウイルス感染症は28%減の890例で、定点あたり報告数は2.91である。北河内3.63、中河内3.43、大阪市北部3.35、南河内3.08、堺市3.00であった。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は6例増の49例の報告があった。

マイコプラズマ肺炎



Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

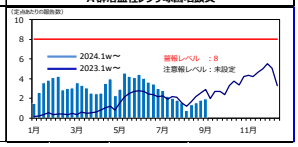


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第37週9月9日～9月15日）

第37週の順位	第36週の順位	感染症	2024年第37週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第37週の定点あたり報告数	2024年第37週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	4.93	5%増	0.37	1 歳_25%
2	2	感染性胃腸炎	3.06	3%減	2.83	1 歳_15%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.99	11%増	2.78	10-14歳_14%
4	4	RSウイルス感染症	0.84	5%減	0.33	1 歳_37%
5	5	ヘルパンギーナ	0.30	17%減	0.43	1 歳_20%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.31	28%減	4.54	20歳以上_22%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.91	28%減	12.99	10-19歳_19%

第37週のコメント

～百日咳～　生後2か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌（*Bordetella pertussis*）による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり（カタル期）、百日咳特有の咳が出始める（痙咳期）。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

百日咳（大阪府感染症情報センター）
百日咳とは（国立感染症研究所）

年別累積報告数（大阪府）

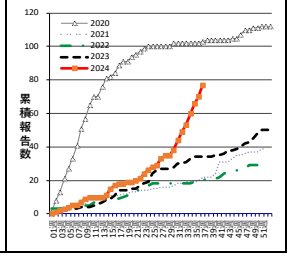


表２．大阪府全数報告数（2024年 第37週9月9日～9月15日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6	1	1	1					3	153
4類感染症	デング熱	1	1								14
	レジオネラ症（肺炎型）	4	1		1					2	84
5類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3		2						1	125
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1					1				83
	後天性免疫不全症候群	1						1			66
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1					1				52
	侵襲性肺炎球菌感染症	2			1					1	179
	水痘（入院例）	1								1	22
	梅毒	7					1		1	5	1,338
	播種性クリプトコックス症	1					1				8
	百日咳	7		1	1				1	4	77
結核（2024年7月分）	結核　新登録患者数：84名（内　肺・喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　612名、内　肺・喀痰塗抹陽性　225名）										

（2024年9月17日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第38週（9月16日～9月22日）

今週のコメント

～新型コロナウイルス感染症～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「新型コロナウイルス感染症 減少続く」

第38週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,089例であり、前週比10.5%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、突発性発しん・ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.49、2.74、1.71、0.68、0.25である。

手足口病の報告数は前週比9%減の885例で、北河内7.08、大阪市北部6.93、三島6.24、中河内5.95、豊能5.87であった。

感染性胃腸炎は10%減の540例で、中河内4.26、南河内4.25、大阪市南部3.44である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は14%減の337例で、大阪市南部3.39、北河内2.32、南河内1.94であった。

RSウイルス感染症は19%減の134例で、大阪市北部1.64、南河内1.19、中河内0.95である。

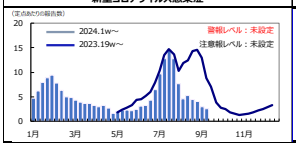
ヘルパンギーナは17%減の49例で、大阪市北部1.07、三島0.29、北河内0.28であった。

インフルエンザは18%増の111例で、定点あたり報告数は0.36である。豊能0.73、大阪市北部0.50、大阪市西部0.47、大阪市東部0.45、中河内0.43であった。

新型コロナウイルス感染症は11%減の791例で、定点あたり報告数は2.58である。泉州3.82、堺市3.10、大阪市北部2.85、大阪市西部2.80、南河内2.79であった。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は2例減の47例の報告がある。

新型コロナウイルス感染症



手足口病

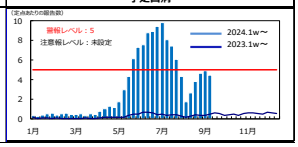


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第38週9月16日～9月22日）

第38週の順位	第37週の順位	感染症	2024年第38週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第38週の定点あたり報告数	2024年第38週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	4.49	9%減	0.46	1 歳_23%
2	2	感染性胃腸炎	2.74	10%減	2.48	1 歳_16%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.71	14%減	1.98	10-14歳_17%
4	4	RSウイルス感染症	0.68	19%減	0.29	1 歳_38%
5	8	突発性発しん	0.25	14%増	0.17	1 歳_52%
5	5	ヘルパンギーナ	0.25	17%減	0.26	1 歳_29%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.36	18%増	5.03	20歳以上_33%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.58	11%減	8.78	10-19歳_18%

第38週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～　大阪府の2024年第38週の累積報告数は、過去10年で最も多い報告数になった。

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌（*Neisseria meningitidis*）による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜刺激症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群（DIC）を呈する。髄膜炎ベルト（meningitis belt）とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、第三世代セフェム系抗菌薬等が使用される。患者との接触者には、緊急に、リファンピシンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌（血清型A、C、Y、W-135）ワクチンの任意接種が開始されている。

髄膜炎菌性髄膜炎とは（国立感染症研究所）
侵襲性髄膜炎菌感染症（厚生労働省）

年別累積報告数

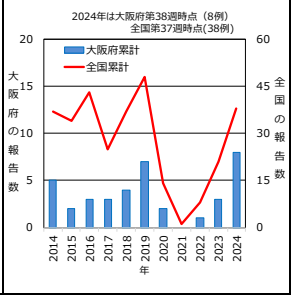


表２．大阪府全数報告数（2024年 第38週9月16日～9月22日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	4		1				1	1	1	161
4類感染症	デング熱	1								1	15
5類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1			1						127
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1	1								8
	侵襲性肺炎球菌感染症	4		1	1		1			1	184
	梅毒	2					2				1,347
	百日咳	2			1				1		80
結核（2024年7月分）	結核　新登録患者数：84名（内　肺・喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　612名、内　肺・喀痰塗抹陽性　225名）										

（2024年9月24日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第39週（9月23日～9月29日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　2週連続して漸増」

第39週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,005例であり、前週比4.0%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.91、2.50、1.40、0.45、0.33である。

手足口病の報告数は前週比9%増の967例で、北河内10.04、中河内6.42、三島5.94、豊能5.09、大阪市北部4.71であった。大阪では、コクサッキーA6型に加えて、コクサッキーA16型が検出されている。

感染性胃腸炎は9%減の493例で、南河内3.69、泉州3.57、大阪市南部2.83である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は18%減の276例で、北河内2.40、大阪市東部1.60、中河内1.53であった。

RSウイルス感染症は34%減の89例で、南河内0.81、大阪市西部0.70、大阪市東部0.67である。

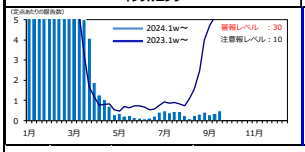
流行性角結膜炎は70%増の17例で、泉州・大阪市東部0.67、北河内・大阪市西部0.50であった。

インフルエンザは35%増の150例で、定点あたり報告数は0.49である。泉州0.68、北河内0.66、三島0.56、大阪市東部0.55、豊能0.54であった。非流行期に入った第17週以降、例年よりも高い数値で推移している。

新型コロナウイルス感染症は25%減の591例で、定点あたり報告数1.93である。泉州2.62、堺市2.52、北河内2.46、大阪市東部2.09、南河内1.88であった。第30週以降減少傾向が続いている。

基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は39例、定点あたり報告数2.17で、例年と比べて報告数の多い状況が続いている。

インフルエンザ



手足口病

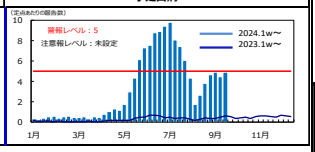


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第39週9月23日～9月29日）

第39週の順位	第38週の順位	感染症	2024年第39週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第39週の定点あたり報告数	2024年第39週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	4.91	9%増	0.64	1歳_21%
2	2	感染性胃腸炎	2.50	9%減	2.77	1歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.40	18%減	2.73	10-14歳_14%
4	4	RSウイルス感染症	0.45	34%減	0.21	1歳_43%
5	8	流行性角結膜炎	0.33	70%増	0.71	20歳以上_71%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.49	35%増	6.61	20歳以上_37%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.93	25%減	7.02	10-19歳_15%

第39週のコメント

～ジカウイルス感染症～　国内では2024年は37週時点で2例の報告があり、大阪では2017年以来の報告です。

全数把握感染症

ジカウイルス感染症

ジカウイルスでは、ネッタイシマカ、ヒトスジシマカ等が媒介蚊として確認されている。日本に生息するヒトスジシマカも媒介可能である。

潜伏期間は3~12日である。流行地域で蚊に刺されてから数日後に、軽度の発熱、発疹、結膜炎、関節痛、筋肉痛、倦怠感、頭痛等の症状を呈する。

海外の流行地域へ出かける際は、できるだけ肌を露出せず、虫よけ剤を使用するなど、蚊に刺されないよう注意が必要である。

妊娠中、特に妊娠初期にジカウイルスに感染すると、胎児に小頭症等の先天性障害を来すことがあるため、妊婦及び妊娠の可能性がある方は、可能な限り流行地域への渡航を避けることが望ましい。

ジカウイルス感染症とは（国立感染症研究所）
ジカウイルス感染症について（厚生労働省）

年別累積報告数

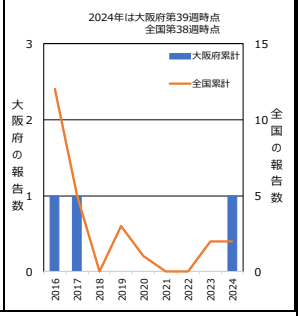


表２．大阪府全数報告数（2024年 第39週9月23日～9月29日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	12	4			2	1		2	3	180
４類感染症	ジカウイルス感染症	1								1	1
	デング熱	1				1					17
	レジオネラ症（肺炎型）	1								1	86
５類感染症	ウイルス性肝炎	1								1	23
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2								2	134
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	1								87
	後天性免疫不全症候群	1								1	68
	水痘（入院例）	1								1	24
	梅毒	12		1			1			10	1,411
	百日咳	4			3				1		90
結核（2024年7月分）	結核　新登録患者数：84名（内　肺・喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　612名、内　肺・喀痰塗抹陽性　225名）										

（2024年10月1日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第40週（9月30日～10月6日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　流行開始期入りの目安に近づく」

第40週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,324例であり、前週比15.9%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.48、2.94、1.84、0.47、0.42である。

手足口病の報告数は、前週比12%増の1,079例で、北河内10.24、中河内7.47、大阪市北部7.07、豊能6.09、三島5.41であり、再び、警報レベル開始基準値５を超えた。

感染性胃腸炎は18%増の580例で、泉州4.67、中河内4.05、南河内4.00である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は32%増の363例で、堺市2.63、大阪市南部2.33、北河内2.32であった。

RSウイルス感染症は4%増の93例で、大阪市東部1.00、南河内0.81、中河内0.68である。

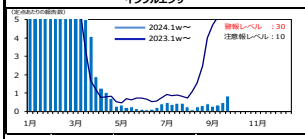
流行性角結膜炎は29%増の22例で、大阪市西部1.00、泉州0.83、豊能0.80であった。

インフルエンザは71%増の256例で、定点あたり報告数は0.84であり、流行期入りの目安である1に近づきつつある。北河内1.37、大阪市西部1.20、大阪市北部1.15、中河内1.13、大阪市東部1.05であった。

新型コロナウイルス感染症は1例増の592例で、定点あたり報告数は1.93である。泉州2.62、大阪市東部2.45、北河内2.22、南河内2.04、堺市1.90であった。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、前週から51%増の59例の報告があり、定点あたり報告数も3.28と前週（2.17）と比較して大きな増加が見られた。

インフルエンザ



手足口病

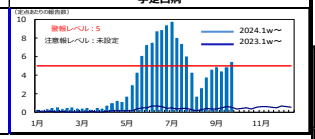


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第40週9月30日～10月6日）

第40週の順位	第39週の順位	感染症	2024年第40週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第40週の定点あたり報告数	2024年第40週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	5.48	12%増	0.51	1歳_23%
2	2	感染性胃腸炎	2.94	18%増	2.71	10-14歳_14%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.84	32%増	2.66	10-14歳_16%
4	4	RSウイルス感染症	0.47	4%増	0.20	1歳_43%
5	5	流行性角結膜炎	0.42	29%増	0.60	20歳以上_86%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.84	71%増	7.13	20歳以上_23%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.93	増減なし	3.85	10-19歳_16%

第40週のコメント

～ デング熱 ～　海外に渡航される方は、蚊に刺されないように、服装に注意し、虫よけ剤を使うなどしましょう

全数把握感染症

デング熱

デング熱は、ネッタイシマカやヒトスジシマカなどの蚊によって媒介されるデングウイルスの感染症である。比較的軽症型のデング熱と、重症型のデング出血熱がある。熱帯・亜熱帯地域、特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国、アフリカで見られ、全世界で年間約1億人がデング熱を発症する。海外渡航で感染し国内で発症する例（輸入症例）が増加しつつあり、2014年の夏季には輸入症例により持ち込まれたと考えられるウイルスにより、150例以上の国内流行が発生した。感染すると、3～7日程度の潜伏期間の後、38～40℃の急激な発熱を発症し、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛が出現する。2～7日で解熱し、解熱とともに発疹が現れることがある。

デング熱について（厚生労働省）
デング熱とは(国立感染症研究所)

年別累積報告数（大阪府）

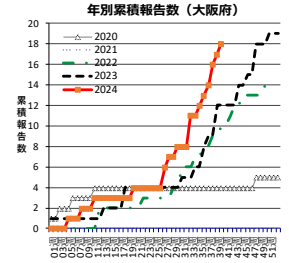


表２．大阪府全数報告数（2024年 第40週9月30日～10月6日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	6				2				4	186
４類感染症	デング熱	1							1		18
	日本紅斑熱	1								1	12
	レジオネラ症（肺炎型）	1							1		87
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1						1			136
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1					1				89
	後天性免疫不全症候群	4					2			2	72
	侵襲性肺炎球菌感染症	3			1				1	1	189
	梅毒	8		1		1	2			4	1,455
	百日咳	3			1					2	93
結核（2024年8月分）	結核　新登録患者数：87名（内　肺・喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　715名、内　肺・喀痰塗抹陽性　261名）										

（2024年10月8日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第41週（10月7日～10月13日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 警報レベルで推移」

第41週の小児科･眼科定点疾患の報告数の総計は2,454例であり、前週比5.6%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.39、2.87、1.64、0.63、0.42である。

手足口病の報告数は前週比17%増の1,258例で、北河内12.88、大阪市北部8.93、中河内7.74、三島7.00、豊能6.43であった。大阪府では、コクサッキーA6型に加えて、コクサッキーA16型が検出されている。

感染性胃腸炎は2%減の566例で、南河内4.81、中河内3.95、堺市3.79である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は11%減の324例で、北河内3.12、大阪市南部2.83、堺市2.58であった。

RSウイルス感染症は33%増の124例で、南河内1.63、大阪市北部1.00、泉州0.76である。

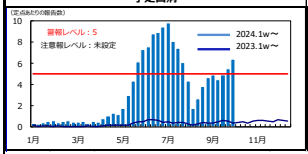
流行性角結膜炎は増減なしの22例で、堺市2.00、大阪市東部0.67、三島･大阪市西部0.50であった。

インフルエンザは11%増の285例で、定点あたり報告数は0.93であり、前週の0.84から引き続き上昇した。大阪市北部1.75、泉州1.32、大阪市東部1.23、大阪市西部1.13、堺市1.03である。ブロックで流行期入りの目安である1を超えている。

新型コロナウイルス感染症は26%減の440例で、定点あたり報告数は1.44である。泉州2.65、堺市1.97、南河内1.79、北河内1.71、豊能1.32である。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、前週から20%減の47例の報告があり、定点あたり報告数は2.61であった。

手足口病



インフルエンザ

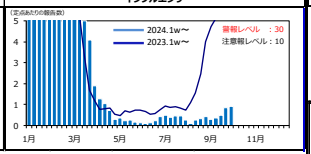


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2024年 第41週10月7日～10月13日）

第41週の順位	第40週の順位	感染症	2024年第41週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第41週の定点あたり報告数	2024年第41週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	6.39	17%増	0.38	1歳_22%
2	2	感染性胃腸炎	2.87	2%減	2.79	1歳_14%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.64	11%減	2.35	5歳_15%
4	4	RSウイルス感染症	0.63	33%増	0.11	1歳未満_38%
5	5	流行性角結膜炎	0.42	増減なし	0.75	20歳以上_86%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.93	11%増	8.28	20歳以上_28%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.44	26%減	2.77	10-19歳_16%

第41週のコメント

～後天性免疫不全症候群～　大阪府では、2024年は第41週時点で2023年の累計報告数に並び、9年ぶりの増加が見込まれる。

全数把握感染症

後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群(AIDS、エイズ)は、ヒト免疫不全ウイルス(HIV)が免疫細胞に感染し、免疫細胞を破壊して後天的に免疫不全を起こす疾患である。適切な治療が施されないと重篤な全身性免疫不全により日和見感染症や悪性腫瘍を引き起こす。近年、治療薬の開発が飛躍的に進み、早期に服薬治療を受ければ免疫力を落とすことなく、通常の生活を送ることが可能となってきた。

日本国内では、日本国籍男性を中心に、同性間性的接触による感染例が多い傾向にある。日本の新規報告数は、近年減少傾向にあったが、2023年に7年ぶりに増加した。予防のための普及啓発、早期発見･早期治療に向けた対策が望まれる。

後天性免疫不全症候群とは(国立感染症研究所)
後天性免疫不全症候群（大阪府感染症情報センター）

年別累積報告数

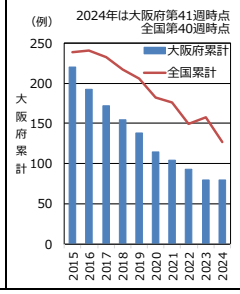


表２．大阪府全数報告数（2024年 第41週10月7日～10月13日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2				1				1	189
４類感染症	Ａ型肝炎	1								1	6
	マラリア（熱帯熱）	1							1		6
	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1								1	88
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1					1				138
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1		1							90
	後天性免疫不全症候群	6								6	80
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1								1	54
	梅毒	9	1	1	1		2		2	2	1,476
	百日咳	2			1					1	97
結核（2024年8月分）	結核　新登録患者数：87名（内　肺･喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　715名、内　肺･喀痰塗抹陽性　261名）										

（2024年10月15日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第42週（10月14日～10月20日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病　警報レベル続く」

第42週の小児科･眼科定点疾患の報告数の総計は2,122例であり、前週比13.5%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.30、2.73、1.38、0.53、0.38である。

手足口病の報告数は前週比17%減の1,044例で、大阪市北部9.21、北河内8.16、中河内7.11、三島6.12、南河内4.94であった。直近では大阪府において、コクサッキーA16型が検出されている。

感染性胃腸炎は5%減の537例で、南河内4.69、北河内3.40、中河内3.37である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は16%減の271例で、堺市2.47、北河内2.44、大阪市南部1.94であった。

RSウイルス感染症は16%減の104例で、大阪市西部0.90、堺市0.89、南河内0.75である。

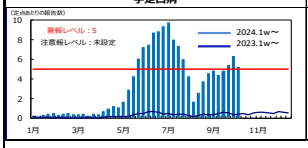
流行性角結膜炎は9%減の20例で、堺市0.80、南河内0.75、中河内0.60であった。

インフルエンザは41%減の168例で、定点あたり報告数は0.55である。堺市1.00、泉州0.88、南河内0.71、大阪市北部0.70、大阪市西部0.60であった。

新型コロナウイルス感染症は30%減の310例で、定点あたり報告数は1.01である。南河内1.50、堺市1.38、泉州1.24、北河内1.20、大阪市東部1.00であった。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は26%増の59例の報告があり、定点あたり報告数は3.28である。

手足口病



インフルエンザ

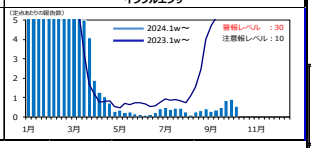


表１．大阪府小児科･眼科定点把握感染症の動向（2024年 第42週10月14日～10月20日）

第42週の順位	第41週の順位	感染症	2024年第42週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第42週の定点あたり報告数	2024年第42週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	5.30	17%減	0.44	1歳_17%
2	2	感染性胃腸炎	2.73	5%減	3.14	1歳_16%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.38	16%減	3.31	10-14歳_16%
4	4	RSウイルス感染症	0.53	16%減	0.13	1歳_41%
5	5	流行性角結膜炎	0.38	9%減	0.77	20歳以上_85%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.55	41%減	11.27	20歳以上_32%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.01	30%減	2.53	80歳以上_15%

第42週のコメント

～百日咳～　生後2か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌（*Bordetella pertussis*）による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり（カタル期）、百日咳特有の咳が出始める（痙咳期）。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

百日咳（大阪府感染症情報センター）
百日咳とは（国立感染症研究所）

年別累積報告数（大阪府）

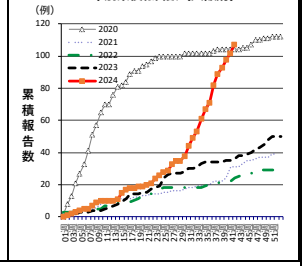


表２．大阪府全数報告数（2024年 第42週10月14日～10月20日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5			1	1			3		196
４類感染症	日本紅斑熱	1				1					13
	レジオネラ症（肺炎型）	4	1		1				1	1	93
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1				1					141
	急性弛緩性麻痺	1		1							2
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1					1				92
	梅毒	9				1		1	2	5	1,529
	百日咳	5			1				1	3	107
結核（2024年8月分）	結核　新登録患者数：87名（内　肺･喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　715名、内　肺･喀痰塗抹陽性　261名）										

（2024年10月22日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第43週（10月21日～10月27日）

今週のコメント

～マイコプラズマ肺炎～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「マイコプラズマ肺炎 報告数多い状態が持続」

第43週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,139例であり、前週比0.8%増であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.66、3.10、1.71、0.40、0.37である。

手足口病の報告数は前週比12%減の919例で、大阪市北部7.50、北河内7.04、中河内6.37、三島5.12、大阪市西部4.30であった。

感染性胃腸炎は14%増の610例で、南河内5.25、大阪市西部4.10、北河内3.92である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は24%増の336例で、大阪市南部3.11、堺市2.74、泉州2.19であった。

RSウイルス感染症は25%減の78例で、大阪市北部1.00、中河内0.58、泉州・北河内0.52である。

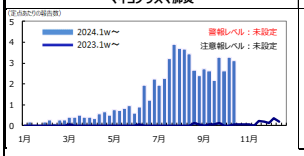
流行性角結膜炎は5%減の19例で、中河内0.80、南河内・泉州・大阪市西部・大阪市東部0.50であった。

インフルエンザは19%増の200例で、定点あたり報告数は0.65である。堺市0.97、大阪市東部0.95、北河内0.85、大阪市北部0.70、豊能0.68であった。

新型コロナウイルス感染症は4%増の318例で、定点あたり報告数は1.04である。大阪市東部1.36、堺市1.34、泉州1.32、豊能1.30、北河内1.27であった。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は5%減の56例の報告があり、定点あたり報告数は3.11である。

マイコプラズマ肺炎



インフルエンザ

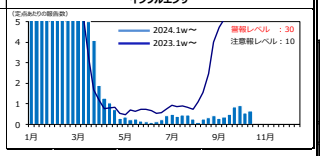


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第43週10月21日～10月27日）

第43週の順位	第42週の順位	感染症	2024年第43週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第43週の定点あたり報告数	2024年第43週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	4.66	12%減	0.49	１歳_18%
2	2	感染性胃腸炎	3.10	14%増	3.44	１歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.71	24%増	3.75	10-14歳_16%
4	4	RSウイルス感染症	0.40	25%減	0.10	１歳未満_36%
5	5	流行性角結膜炎	0.37	5%減	0.71	20歳以上_79%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.65	19%増	12.65	20歳以上_25%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.04	3%増	1.82	80歳以上_17%

第43週のコメント

～百日咳～　生後2か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌（*Bordetella pertussis*）による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり（カタル期）、百日咳特有の咳が出始める（痙咳期）。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

百日咳（大阪府感染症情報センター）
百日咳とは（国立感染症研究所）

年別累積報告数（大阪府）

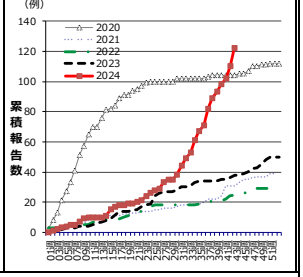


表２．大阪府全数報告数（2024年 第43週10月21日～10月27日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3			1	2					195
４類感染症	E 型肝炎	1								1	4
５類感染症	アメーバ赤痢	3		1						2	32
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1					1				146
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2	1							1	94
	シアルシア症	1								1	3
	侵襲性肺炎球菌感染症	3					1		1	1	195
	梅毒	13		2	1	1	2			7	1,565
	百日咳	12			4		2		2	4	122
結核（2024年8月分）	結核　新登録患者数：87名（内　肺・喀痰塗抹陽性　27名）（府内累積報告数　715名、内　肺・喀痰塗抹陽性　261名）										

（2024年10月29日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第44週（10月28日～11月3日）

今週のコメント

～手足口病～　手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病　３週連続減少」

第44週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,066例であり、前週比3.4%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、突発性発しんの順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.12、3.37、1.54、0.57、0.26である。

手足口病の報告数は前週比12%減の811例で、大阪市北部8.86、北河内5.72、中河内4.53、三島4.47、豊能3.87であった。

感染性胃腸炎は9%増の664例で、南河内6.25、堺市4.32、泉州4.14である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は10%減の304例で、北河内2.60、大阪市南部2.33、堺市2.21であった。

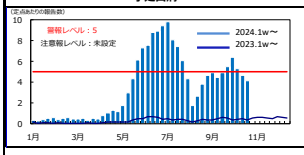
RSウイルス感染症は44%増の112例で、北河内1.00、南河内0.81、大阪市北部0.64である。

インフルエンザは22%増の243例で、定点あたり報告数は0.79であった。大阪市南部1.44、北河内1.41、堺市0.90、大阪市東部0.86、豊能0.68である。

新型コロナウイルス感染症は19%減の257例で、定点あたり報告数は0.84であった。南河内1.25、泉州1.24、堺市1.14、大阪市北部1.05、北河内0.80である。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は5%増の59例の報告があり、定点あたり報告数は3.28であった。依然として報告数が多い状況が続いている。

手足口病



マイコプラズマ肺炎

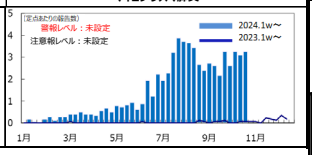


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第44週10月28日～11月3日）

第44週の順位	第43週の順位	感染症	2024年第44週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第44週の定点あたり報告数	2024年第44週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	4.12	12%減	0.38	１歳_19%
2	2	感染性胃腸炎	3.37	9%増	3.41	１歳_13%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.54	10%減	3.37	10-14歳_15%
4	4	RSウイルス感染症	0.57	44%増	0.06	１歳_32%
5	6	突発性発しん	0.26	4%増	0.22	１歳_54%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.79	22%増	13.27	20歳以上_25%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	0.84	19%減	1.54	80歳以上_15%

第44週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～　大阪府および全国の2024年の累積報告数は、過去10年で最多である

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌（*Neisseria meningitidis*）による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜刺激症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群（DIC）を呈する。髄膜炎ベルト（meningitis belt）とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、第三世代セフェム系抗菌薬等が使用される。患者との接触者には、緊急に、リファンピシンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌（血清型A、C、Y、W-135）ワクチンの任意接種が開始されている。

髄膜炎菌性髄膜炎とは（国立感染症研究所）
髄膜炎菌性髄膜炎（厚生労働省）

年別累積報告数

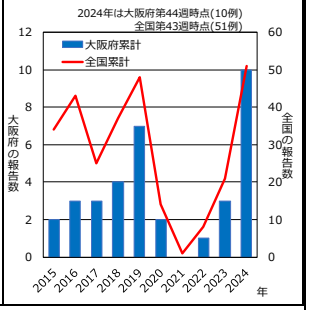


表２．大阪府全数報告数（2024年 第44週10月28日～11月3日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（　）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	1								1	200
４類感染症	レジオネラ症(肺炎型)	1								1	97
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1	1								149
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1								1	10
	侵襲性肺炎球菌感染症	4	1							3	200
	水痘（入院例）	1		1							27
	梅毒	10			3		1			6	1,609
	百日咳	7		1	2		1			3	132
結核（2024年9月分）	結核　新登録患者数：67名（内　肺・喀痰塗抹陽性　20名）（府内累積報告数　796名、内　肺・喀痰塗抹陽性　290名）										

（2024年11月5日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第45週（11月4日～11月10日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　3週連続増加」

第45週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,766例であり、前週比14.5%減であった。定点あたり報告数の第１位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.53、2.70、1.23、0.69、0.28である。

手足口病は前週比14%減の696例で、大阪市北部6.43、北河内5.48、中河内4.95、大阪市南部3.50、三島3.41であった。

感染性胃腸炎は20%減の532例で、南河内4.00、中河内3.84、豊能3.48である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は20%減の243例で、大阪市南部2.00、大阪市東部1.67、南河内1.50であった。

RSウイルス感染症は21%増の135例で、中河内1.21、北河内1.12、大阪市北部1.00である。

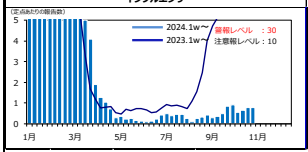
咽頭結膜熱は47%増の56例で、中河内0.84、大阪市北部0.43、大阪市東部0.40であった。

インフルエンザは2例増の245例で、定点あたり報告数は0.80である。豊能1.41、南河内1.38、大阪市東部1.18、大阪市北部0.90、大阪市西部0.80であった。大阪府では、現在AH1pdmが検出されている。全国集計では、第44週に定点あたり報告数が流行開始期入りの目安の1を超え、流行期入りしたと発表された。

新型コロナウイルス感染症は5%減の245例で定点あたり報告数は0.80である。大阪市東部1.50、豊能0.95、南河内0.92、泉州0.91、堺市0.86であった。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は2例増の61例の報告があり、定点あたり報告数は3.39である。

インフルエンザ



マイコプラズマ肺炎

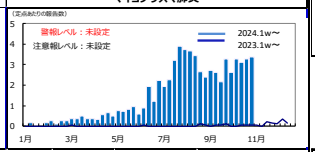


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第45週11月4日～11月10日）

第45週の順位	第44週の順位	感染症	2024年第45週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第45週の定点あたり報告数	2024年第45週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	手足口病	3.53	14%減	0.55	1歳_17%
2	2	感染性胃腸炎	2.70	20%減	3.95	1歳_14%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.23	20%減	4.19	10-14歳_18%
4	4	RSウイルス感染症	0.69	21%増	0.13	1歳未満_34%
5	6	咽頭結膜熱	0.28	47%増	3.67	1歳_29%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	0.80	1%増	12.73	20歳以上_27%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	0.80	5%減	1.36	80歳以上_14%

第45週のコメント

～百日咳～　生後2か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌（*Bordetella pertussis*）による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり（カタル期）、百日咳特有の咳が出始める（痙咳期）。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

百日咳（国立感染症研究所）
百日咳（大阪府感染症情報センター）

年別累積報告数（大阪府）

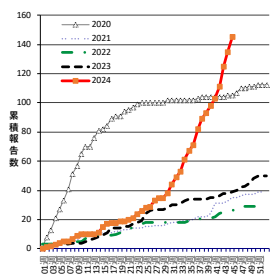


表２．大阪府全数報告数（2024年 第45週11月4日～11月10日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3					1		1	1	205
４類感染症	日本紅斑熱	1								1	14
	レジオネラ症(肺炎型)	1					1				100
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1				1					150
	急性脳炎	1							1		15
	後天性免疫不全症候群	1								1	83
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1					1				57
	侵襲性肺炎球菌感染症	4					1		1	2	204
	梅毒	17			1			1	1	14	1,657
	百日咳	10	1		2		2		3	2	145
結核（2024年9月分）	結核　新登録患者数：67名（内　肺・喀痰塗抹陽性　20名）（府内累積報告数　796名、内　肺・喀痰塗抹陽性　290名）										

（2024年11月12日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第46週（11月11日～11月17日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　流行期入り」

第46週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,843例であり、前週比4.4%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.44、2.53、1.64、0.81、0.46である。

感染性胃腸炎の報告数は前週比27%増の678例で、南河内5.44、中河内4.58、泉州3.90、三島3.76、北河内3.68であった。

手足口病は28%減の498例で、大阪市北部4.50、北河内3.96、中河内3.79である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は33%増の324例で、大阪市南部2.89、大阪市西部2.20、堺市2.05であった。

RSウイルス感染症は19%増の160例で、北河内1.72、大阪市北部1.50、南河内1.31である。

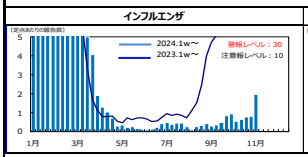
流行性角結膜炎は243%増の24例で、北河内1.17、堺市0.80、南河内0.75であった。

インフルエンザは146%増の602例で、定点あたり報告数は1.97である。豊能3.43、大阪市西部3.13、大阪市北部3.10、北河内2.39、堺市2.31であった。全ブロックで前週より増加し、流行開始期入りの目安となる定点あたり報告数1を超えた。

新型コロナウイルス感染症は41%増の347例で、定点あたり報告数は1.13である。泉州1.76、大阪市東部1.59、堺市1.55、大阪市西部1.27、北河内1.20であった。年齢別の割合は、50歳代が14%と最も高く、次いで70歳代、80歳以上、30歳代の12%である。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は4例減の57例の報告があり、定点あたり報告数は3.17であった。

インフルエンザ



新型コロナウイルス感染症

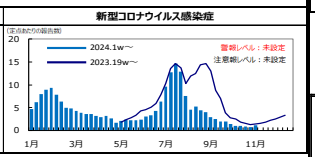


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第46週11月11日～11月17日）

第46週の順位	第45週の順位	感染症	2024年第46週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第46週の定点あたり報告数	2024年第46週の年齢別患者発生数最大割合値
1	2	感染性胃腸炎	3.44	27%増	4.97	1歳_14%
2	1	手足口病	2.53	28%減	0.62	1歳_19%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.64	33%増	4.33	10-14歳_19%
4	4	RSウイルス感染症	0.81	19%増	0.08	1歳_34%
5	7	流行性角結膜炎	0.46	243%増	0.48	20歳以上_58%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	1.97	146%増	15.65	20歳以上_28%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.13	42%増	1.41	50-59歳_14%

第46週のコメント

～麻しん～　ワクチンで予防可能な感染症です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん（はしか）は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発しん性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発しんが出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力（一人の患者が12～18人に感染伝播）のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、欧州やアフリカで麻しんが流行している。症状（発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等）があり、１）１か月以内に麻しん患者と接触していた場合、２）麻しん流行国（主にアジア、欧州及びアフリカ諸国）に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン（1歳以上で2回）で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

麻しんとは（国立感染症研究所）
麻しん情報（大阪府感染症情報センター）

年別累計報告数

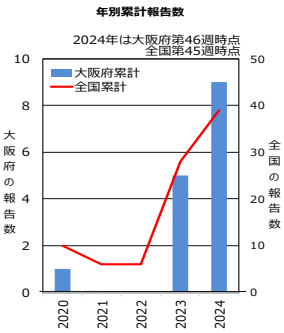


表２．大阪府全数報告数（2024年 第46週11月11日～11月17日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2								2	207
４類感染症	日本紅斑熱	1	1								16
５類感染症	アメーバ赤痢	1		1							34
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1							1		152
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1			1						58
	侵襲性肺炎球菌感染症	3				1			1	1	207
	梅毒	12			1	1	2		1	7	1,680
	百日咳	14	2	1	3		1		2	5	162
	麻しん	1							1		9
結核（2024年9月分）	結核　新登録患者数：67名（内　肺・喀痰塗抹陽性　20名）（府内累積報告数　796名、内　肺・喀痰塗抹陽性　290名）										

（2024年11月19日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第47週（11月18日～11月24日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ増加」

第47週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,637例であり、前週比11.2%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.59、2.05、1.31、0.52、0.46である。

感染性胃腸炎の報告数は前週比4%増の707例で、大阪市南部5.39、南河内4.69、大阪市西部4.30、堺市4.21、大阪市北部3.93であった。

手足口病は19%減の403例で、大阪市北部3.36、北河内2.72、中河内2.68である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は20%減の258例で、大阪市南部2.17、北河内2.00、堺市1.74であった。

RSウイルス感染症は36%減の103例で、中河内1.16、南河内・大阪市北部1.00である。

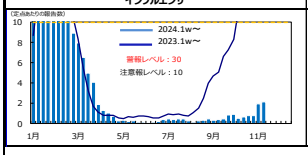
流行性角結膜炎は増減なしの24例で、堺市1.20、北河内1.17、大阪市東部0.67であった。

インフルエンザは10%増の663例で、定点あたり報告数は2.17である。大阪市北部4.55、大阪市西部3.47、南河内3.46、堺市2.31、豊能2.30であった。

新型コロナウイルス感染症は9%減の316例で、定点あたり報告数は1.03である。堺市1.52、南河内1.38、大阪市北部1.20、大阪市南部1.04、泉州1.03であった。年齢別では、70歳代、80歳代以上の割合が27%となり、前週と比べ増加している。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は6例増の63例の報告があり、定点あたり報告数は3.50である。

インフルエンザ



マイコプラズマ肺炎

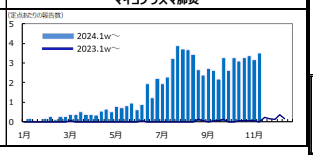


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第47週11月18日～11月24日）

第47週の順位	第46週の順位	感染症	2024年第47週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第47週の定点あたり報告数	2024年第47週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	3.59	4%増	5.05	1歳_13%
2	2	手足口病	2.05	19%減	0.61	1歳_20%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.31	20%減	4.20	10-14歳_15%
4	4	RSウイルス感染症	0.52	36%減	0.12	1歳_33%
5	5	流行性角結膜炎	0.46	増減なし	0.44	20歳以上_54%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	2.17	10%増	19.47	20歳以上_27%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.03	9%減	1.61	50-59歳_14%

第47週のコメント

～つつが虫病～　2024年大阪府では、第47週現在2例の報告がある。

全数把握感染症

つつが虫病

つつが虫病は、つつが虫病リケッチア(*Orientia tsutsugamushi*)を起因病原体とし、野山でダニの一種であるツツガムシの幼虫に吸着されることにより感染する。ツツガムシの活動が活発化する5-6月と11-12月に発生が多い。 潜伏期は5～14日であり、発熱、発しん、刺し口が主要三徴候である。高熱を伴って発症し、皮膚には特徴的な刺し口（黒色痂疲）がみられ、その後体幹部を中心に発しんがみられる。検査所見では肝逸脱酵素の上昇、血小板の減少が認められる。治療には、抗菌薬投与が効果的であり、第一選択薬はテトラサイクリン系の抗菌薬である。β-ラクタム系の抗菌薬は全く無効である。

ツツガムシ病とは(国立感染症研究所)

年別累計報告数

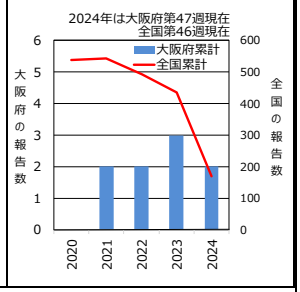


表２．大阪府全数報告数（2024年 第47週11月18日～11月24日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。)

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5			3					2	212
４類感染症	つつが虫病	1	1								2
	デング熱	2			1					1	20
５類感染症	アメーバ赤痢	1					1				35
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3								3	156
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1					1				11
	侵襲性肺炎球菌感染症	3			1				1	1	213
	梅毒	15	2	1	1	1			2	8	1,725
	播種性クリプトコックス症	1			1						12
	百日咳	18			8		1	1		8	184
結核（2024年9月分）	結核　新登録患者数：67名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　20名）（府内累積報告数　796名、内　肺・喀痰塗抹陽性　290名）										

（2024年11月26日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）
2024年 第48週（11月25日～12月1日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　全ブロックで増加」

第48週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,819例であり、前週比11.1%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.29、1.74、1.58、0.62、0.37である。

感染性胃腸炎の報告数は前週比20%増の845例で、中河内5.95、南河内4.88、豊能4.83、泉州4.71、堺市4.68であった。

手足口病は15%減の342例で、大阪市南部2.50、大阪市北部2.29、堺市2.16である。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は21%増の311例で、北河内2.40、大阪市南部1.94、堺市1.84であった。

RSウイルス感染症は18%増の122例で、南河内1.25、北河内1.12、大阪市北部1.07である。

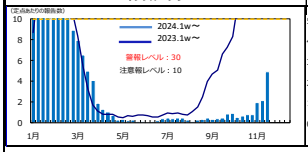
流行性角結膜炎は21%減の19例で、三島1.25、北河内0.83、堺市0.80であった。

インフルエンザは127%増の1,503例で、定点あたり報告数は4.91である。南河内9.00、大阪市北部7.05、大阪市西部6.33、北河内4.93、泉州4.76である。全11ブロックで増加していた。年齢別では20歳以上が27%と最も多く、次いで10歳から14歳になっている。大阪府では11月にAH1pdmとAH3が検出されていた。

新型コロナウイルス感染症は41%増の447例で、定点あたり報告数は1.46である。堺市2.48、大阪市南部1.93、北河内1.85、泉州1.65、南河内1.63であった。70歳以上の割合は前週より増加している。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は50例と前週より13例減であるが、定点あたり報告数は2.78と例年より多い状況が続いている。

インフルエンザ



マイコプラズマ肺炎

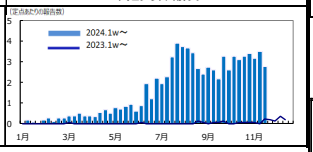


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第48週11月25日～12月1日）

第48週の順位	第47週の順位	感染症	2024年第48週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第48週の定点あたり報告数	2024年第48週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.29	20%増	5.20	1歳_13%
2	2	手足口病	1.74	15%減	0.52	4歳_19%
3	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.58	21%増	4.69	4歳_15%
4	4	RSウイルス感染症	0.62	18%増	0.11	1歳_33%
5	5	流行性角結膜炎	0.37	21%減	0.50	20歳以上_63%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	4.91	127%増	17.54	20歳以上_27%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.46	41%増	1.82	70-79歳、80歳以上_17%

第48週のコメント

～麻しん～　ワクチンで予防可能な感染症です

全数把握感染症

麻しん

麻しん（はしか）は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発しん性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発しんが出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力（一人の患者が12～18人に感染伝播）のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状（発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等）があり、１）１か月以内に麻しん患者と接触していた場合、２）麻しん流行国（主にアジア及びアフリカ諸国）に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン（1歳以上で2回）で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

麻しんとは（国立感染症研究所）
麻しん情報（大阪府感染症情報センター）

年別累計報告数

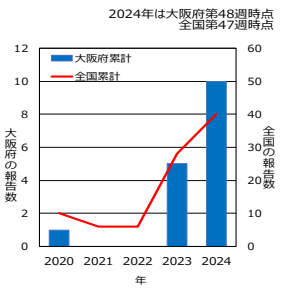


表２．大阪府全数報告数（2024年 第48週11月25日～12月1日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。)

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3			2				1		215
４類感染症	デング熱	1							1		21
	レジオネラ症（肺炎型）	4			1		2			1	107
５類感染症	アメーバ赤痢	1								1	36
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1				1					99
	後天性免疫不全症候群	1								1	85
	侵襲性肺炎球菌感染症	2				1				1	220
	梅毒	19		1	1	2	1		1	13	1,781
	破傷風	2					1			1	4
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1								1	15
	百日咳	16			4		1		5	6	207
	麻しん	1				1					10
結核（2024年10月分）	結核　新登録患者数：77名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　36名）（府内累積報告数　873名、内　肺・喀痰塗抹陽性　328名）										

（2024年12月3日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第49週（12月2日～12月8日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　注意報レベルを超える」

第49週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,986例であり、前週比9.2%増であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.16、1.65、1.16、0.83、0.53である。

感染性胃腸炎の報告数は前週比20%増の1,012例で、南河内7.94、泉州5.90、豊能5.70、大阪市南部5.61、堺市5.47であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%増の324例で、大阪市南部2.72、北河内2.20、堺市2.11である。

手足口病の報告数は前週比34%減の227例で、泉州・大阪市北部1.71、中河内1.47であった。

RSウイルス感染症は33%増の162例で、南河内1.69、大阪市北部1.50、大阪市西部1.30である。

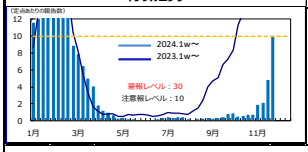
咽頭結膜熱は51%増の104例で、大阪市南部1.22、中河内1.05、南河内0.81であった。

インフルエンザは104%増の3,066例で、北河内14.80、南河内14.13、大阪市西部13.13、泉州10.06、大阪市北部9.80である。定点あたり報告数は10.05となり、注意報レベルである10を超えた。

新型コロナウイルス感染症は7%減の416例で、定点あたり報告数は1.36であった。泉州1.85、南河内1.79、大阪市北部1.75、堺市1.66、北河内1.63である。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は52例と前週より２例増加した。定点あたり報告数は2.89と例年よりかなり多い状況が続いている。

インフルエンザ



マイコプラズマ肺炎

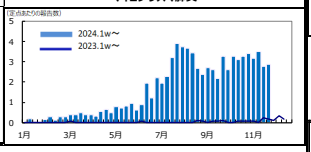


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第49週12月2日～12月8日）

第49週の順位	第48週の順位	感染症	2024年第49週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第49週の定点あたり報告数	2024年第49週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.16	20%増	5.25	1歳_13%
2	3	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.65	4%増	5.01	10-14歳_14%
3	2	手足口病	1.16	34%減	0.47	2歳_18%
4	4	RSウイルス感染症	0.83	33%増	0.11	1歳_35%
5	6	咽頭結膜熱	0.53	51%増	2.57	1歳_24%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	10.05	104%増	22.20	20歳以上_25%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.36	7%減	2.27	50-59歳_14%

第49週のコメント

～麻しん～　ワクチンで予防可能な感染症です。

全数把握感染症

麻しん

麻しん（はしか）は麻しんウイルスによって引き起こされる発熱を伴う発しん性疾患で、感染すると高熱と結膜炎などの症状と、全身性の発しんが出現する。潜伏期間は1-2週間である。強い感染力（一人の患者が12～18人に感染伝播）のため、麻しん発生時には早期の診断と感染拡大に対する措置が重要となる。2015年3月、日本は麻しん排除国に認定されている。しかし、現在でもアジア、アフリカやヨーロッパ諸国で麻しんが流行している。症状（発熱、せき、鼻水、眼球結膜の充血、発しん等）があり、１）１か月以内に麻しん患者と接触した場合、２）麻しん流行国（主にアジア及びアフリカ諸国）に最近の旅行歴がある場合、麻しんを疑い、感染拡大を防止するため、医療機関を早期に受診する。受診に際し、医療機関に事前連絡し、麻しん疑いを伝え、指示に従うことが重要である。麻しんはワクチン（1歳以上で2回）で予防可能な感染症であり、接種の徹底が予防や感染拡大の防止に重要である。

麻しん情報（大阪府感染症情報センター）
麻疹とは(国立感染症研究所)

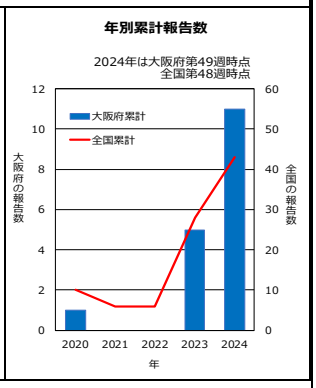


表２．大阪府全数報告数（2024年 第49週12月2日～12月8日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2	2									217
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1								1		110
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3	1							2		168
	後天性免疫不全症候群	1								1		87
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1						1				63
	侵襲性肺炎球菌感染症	7	4						2	1		230
	梅毒	17	1	2		1			1	12		1,824
	百日咳	22		2	5		4		4	7		241
	麻しん	1								1		11
結核（2024年10月分）	結核　新登録患者数：77名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　36名）（府内累積報告数　873名、内　肺・喀痰塗抹陽性　328名）											

（2024年12月10日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第50週（12月9日～12月15日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　2週連続で倍増」

第50週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,958例であり、前週比1.4%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.19、1.88、0.89、0.80、0.41である。

感染性胃腸炎の報告数は前週比1%増の1,018例で、南河内9.44、大阪市南部6.78、堺市6.47、三島5.59、泉州5.57であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は14%増の369例で、大阪市南部2.94、北河内2.88、堺市2.26である。

RSウイルス感染症は7%増の174例で、大阪市北部2.00、北河内1.80、大阪市西部1.10であった。

手足口病は31%減の156例で、堺市1.16、北河内・大阪市北部1.00である。

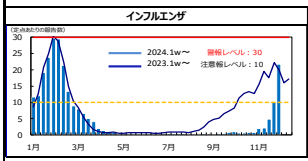
咽頭結膜熱は23%減の80例で、大阪市北部0.79、南河内0.75、大阪市東部0.71であった。

インフルエンザは115%増の6,599例で、定点あたり報告数は21.64である。南河内は31.71で、警報レベルである30を超えた。北河内26.98、大阪市北部26.30、堺市22.86、大阪市西部21.07である。

新型コロナウイルス感染症は30%増の542例で、定点あたり報告数は1.78であった。大阪市北部2.65、南河内2.21、北河内1.90、泉州・大阪市南部1.85である。70歳以上の割合が、29%となり、前週より増加していた。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は34例で、前週より18例減少した。但し、定点あたり報告数は1.89と例年よりかなり多く、引き続き注意を要する状況である。

インフルエンザ



マイコプラズマ肺炎

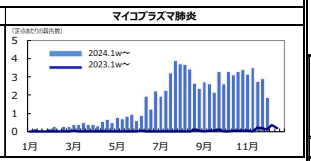


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第50週12月9日～12月15日）

第50週の順位	第49週の順位	感染症	2024年第50週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第50週の定点あたり報告数	2024年第50週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.19	1%増	5.50	10-14歳_12%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.88	14%増	5.51	10-14歳_17%
3	4	RSウイルス感染症	0.89	7%増	0.13	1歳_28%
4	3	手足口病	0.80	31%減	0.66	1歳_18%
5	5	咽頭結膜熱	0.41	23%減	2.44	1歳_22%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	21.64	115%増	19.72	20歳以上_26%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	1.78	30%増	2.49	80歳以上_16%

第50週のコメント

～百日咳～　　生後2か月からの予防接種が重要

全数把握感染症

百日咳

百日咳は、百日咳菌（*Bordetella pertussis*）による急性の気道感染症である。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり（カタル期）、百日咳特有の咳が出始める（痙咳期）。新生児や乳児早期では、肺炎、脳症を合併することがある。マクロライド系抗菌薬が有効であるが、近年、薬剤耐性菌も報告されている。百日咳の予防には、ワクチン接種が有効であり、乳幼児期に計4回接種されている。2018年1月1日に小児科定点把握感染症から全数把握感染症に変更され、成人の報告数の把握が進んでいる。

百日咳（国立感染症研究所）
百日咳（大阪府感染症情報センター）

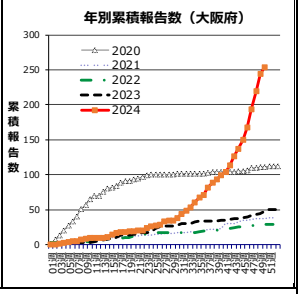


表２．大阪府全数報告数（2024年 第50週12月9日～12月15日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】> 全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	報告数	府内累積
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	2							1	1		221
４類感染症	レジオネラ症（ポンティアック熱型）	1			1							112
	レジオネラ症（肺炎型）	1					1					
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	3		1						2		171
	急性脳炎	1							1			16
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1								1		102
	侵襲性肺炎球菌感染症	3	1		1					1		237
	水痘（入院例）	1								1		31
	梅毒	12	1		1	1				9		1,861
	百日咳	9	1		4					4		253
結核（2024年10月分）	結核　新登録患者数：77名　（内　肺・喀痰塗抹陽性　36名）（府内累積報告数　873名、内　肺・喀痰塗抹陽性　328名）											

（2024年12月17日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第51週（12月16日～12月22日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用、ワクチン接種が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　警報レベルを大きく超える」

第51週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,862例であり、前週比4.9%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病、流行性角結膜炎の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.06、1.79、0.96、0.57、0.42である。

感染性胃腸炎の報告数は前週比3%減の991例で、南河内8.81、大阪市西部6.50、豊能5.91、中河内5.47、北河内5.20であった。

Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%減の350例で、北河内3.00、堺市2.63、大阪市南部2.11である。

RSウイルス感染症は9%増の189例で、大阪市西部2.20、大阪市北部2.14、北河内1.52であった。

手足口病は29%減の111例で、堺市1.00、豊能0.83、南河内0.69である。

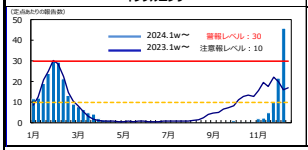
流行性角結膜炎は38%増の22例で、豊能1.40、大阪市北部0.80、三島0.75であった。

インフルエンザは111%増の13,953例で、定点あたり報告数は45.75で、警報レベル開始基準値30を超えた。コロナ禍前のインフルエンザ流行期以来の高値である。南河内63.63、大阪市西部53.80、堺市53.28、北河内52.66、大阪市北部50.40であった。大阪府ではAH1pdmが優位に検出されていた。

新型コロナウイルス感染症は61%増の874例で、定点あたり報告数は2.87である。堺市3.48、北河内3.46、大阪市北部3.35、豊能3.22、南河内3.00であった。全11ブロックで前週より増加した。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は29例で、前週より5例減少した。

インフルエンザ



新型コロナウイルス感染症

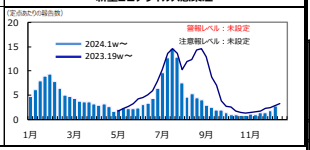


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2024年 第51週12月16日～12月22日）

第51週の順位	第50週の順位	感染症	2024年第51週の定点あたり報告数	前週比増減	2023年第51週の定点あたり報告数	2024年第51週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.06	3%減	4.95	1歳_13%
2	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.79	5%減	4.98	10-14歳_16%
3	3	RSウイルス感染症	0.96	9%増	0.09	1歳未満_33%
4	4	手足口病	0.57	29%減	0.60	2歳_20%
5	6	流行性角結膜炎	0.42	38%増	0.52	20歳以上_59%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	45.75	111%増	15.77	20歳以上_29%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.87	61%増	2.92	80歳以上_13%

第51週のコメント

～梅毒～　大阪府における梅毒累計報告数は昨年同時期についで多く、全国では2021年7,978例、2022年13,221例、2023年14,906例と増加している。

全数把握感染症

梅毒

全国の梅毒の年間報告数は、2020年5,867例、2021年7,978例、2022年13,221例、2023年は過去最高の14,906例と増加している。大阪府においても、2023年は2,019例で現行の集計方法で過去最高の年間報告数であった。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

梅毒とは(国立感染症研究所)
梅毒（大阪府感染症情報センター）

年別累積報告数（大阪府）

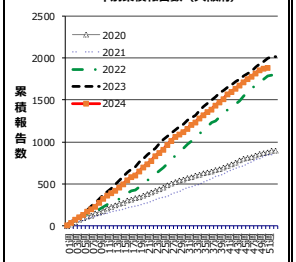


表２．大阪府全数報告数（2024年 第51週12月16日～12月22日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
３類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3			1	1				1	224
４類感染症	日本紅斑熱	1								1	17
５類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2							1	1	176
	急性脳炎	2							2		19
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1					1				103
	後天性免疫不全症候群	1								1	89
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2					1			1	65
	侵襲性肺炎球菌感染症	3							1	2	241
	水痘（入院例）	1								1	32
	梅毒	13	1	1	1		1		2	7	1,884
	百日咳	11	1		3	1	1		1	4	269
結核（2024年10月分）	結核　新登録患者数：77名（内　肺・喀痰塗抹陽性　36名）（府内累積報告数　873名、内　肺・喀痰塗抹陽性　328名）										

（2024年12月24日　集計分）

大阪府感染症発生動向調査週報　（速報）

2024年 第52週（12月23日～12月29日）～　2025年 第1週（12月30日～1月5日）

今週のコメント

～インフルエンザ～　咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ　高水準で流行続く」

2024年第52週と2025年第1週をあわせて報告する。今週の報告数は、年末年始休暇による診療実日数の減少を考慮する必要がある。

第52週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は1,784例であり、前週比4.2%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性角結膜炎、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.90、1.58、1.09、0.48、0.44である。

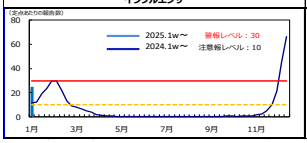
第1週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は275例であり、前週比84.6%減であった。定点あたり報告数の第１位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱・水痘・手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ0.70、0.31、0.24、0.04である。

第52週のインフルエンザは45%増の20,211例で、定点あたり報告数は66.27であった。第1週は62%減の7,658例で、定点あたり報告数は25.36である。大阪市西部122.33、大阪市北部46.84、南河内32.08、豊能30.53、泉州25.15であった。第52週は、現行の集計方法になってから、最高の報告数となった。

第52週の新型コロナウイルス感染症は28%増の1,120例で、定点あたり報告数は3.67であった。第1週は30%減の718例で、定点あたり報告数は2.38である。大阪市西部7.67、南河内3.50、泉州3.18、豊能2.67、堺市2.62であった。

基幹定点把握疾患のマイコプラズマ肺炎は、第52週が前週より17例減の12例で、第1週は7例である。

インフルエンザ



新型コロナウイルス感染症

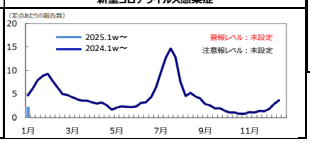


表１．大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2025年 第1週12月30日～1月5日）

第1週の順位	第52週の順位	感染症	2025年第1週の定点あたり報告数	前週比増減	2024年第1週の定点あたり報告数	2025年第1週の年齢別患者発生数最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	0.70	86%減	2.48	20歳以上_25%
2	3	RSウイルス感染症	0.31	72%減	0.10	1歳未満_42%
3	2	Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.24	85%減	1.53	8歳,20歳以上_13%
4	5	咽頭結膜熱	0.04	91%減	0.65	10-14歳_25%
4	7	水痘	0.04	86%減	0.15	7歳_43%
4	6	手足口病	0.04	89%減	0.34	5歳_43%
参考		インフルエンザ（インフルエンザ定点報告疾患）	25.36	62%減	11.67	20歳以上_63%
参考		新型コロナウイルス感染症（COVID-19定点報告疾患）	2.38	36%減	4.72	50-59歳_15%

詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症患者の発生状況について(大阪府)」の情報をご覧ください。
詳細はリンク先の「新型コロナウイルス感染症(大阪府感染症情報センター)」の情報をご覧ください。

第1週のコメント

～侵襲性髄膜炎菌感染症～　大阪府の2024年（速報値）の累積報告数（11例）は、過去10年で最も多かった

全数把握感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、髄膜炎菌（*Neisseria meningitidis*）による侵襲性の感染症である。潜伏期は通常2～10日で、髄膜炎例では頭痛、発熱、髄膜刺激症状、痙攣、意識障害を示し、敗血症例では発熱、悪寒、ショック、播種性血管内凝固症候群（DIC）を呈する。髄膜炎ベルト（meningitis belt）とよばれるアフリカ中央部で発生が多く、日本では、学生寮等で集団発生の報告がある。治療には、ペニシリン系抗菌薬と第三世代セフェム系抗菌薬が有効である。患者との接触者には、緊急に、リファンピシンの予防投与が行われる。日本では、2015年より、4価髄膜炎菌（血清型A、C、Y、W-135）ワクチンの任意接種が開始されている。

髄膜炎菌性髄膜炎とは（国立感染症研究所）
侵襲性髄膜炎菌感染症（厚生労働省）

年別累積報告数

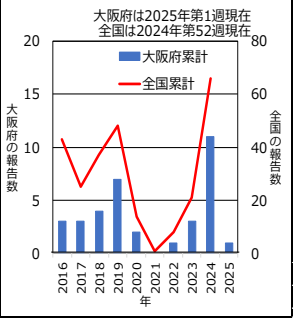


表２．大阪府全数報告数（2025年 第1週12月30日～1月5日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
（報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ＞【週報】＞全数把握疾患　をご覧ください。）

	疾患名（ ）内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
４類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	1								1	1
５類感染症	侵襲性髄膜炎菌感染症	1					1				1
	侵襲性肺炎球菌感染症	2	1							1	2
	梅毒	1								1	1
	百日咳	3			1		1			1	3
結核（2024年11月分）	結核　新登録患者数：105名（内　肺・喀痰塗抹陽性　42名）（府内累積報告数　1,043名、内　肺・喀痰塗抹陽性　395名）										

（2025年1月7日　集計分）